貞享式海印錄

表許物四多
裡白巻拳白
奉納夢直善
人倫姿用唱
山水塲居処

二

自享式海印錄二　　曲齋述

□去聲悪論

本云 仏法を指合のるゝ所なれ疑所の教を序説のみ教を
るあり所なれども二度の不冒をもて初めの法分序
▲亦多い様仏の字あれい古法の去聲を問とせず
いふんるれども後学せやとり学れを古式を或も
五去聲共句〳〵の出るを仏て三去も二去も共仏
あるお裁をも法されり「初めの法分許せ」ある
をもて古式を拘さる所なくまふり去聲を必〳〵
せされい是と宜さる按おられと「人」共佛この使
を涯とせ〜かく人〳〵会るの説も同意の説もあり
今則とせ句去を聲きわをとる（きるく）
一句の母悪を先法て指合後の意義なるへ指合
とい辞のるく去聲とい系おのれ指合去聲乃
用て変化のるくと先其故をもる〜

一句の毋要ハ仏のすがすがしさを見て一句会さ
ゝと胃腑の変を治するゆゑ〻お情を変る叶ゑ
猫の戒め角と対ても忘の字ひきたゝ花と咲とせられ
む生れの治いけを除て後一又者を見位を分る時を
逆句い在天空を奚ゐるとゆ其情通ハ許すもとそ
接合ハ字あのゆ去逆ハ神尺意無乃久紀山川
衣合生極ゆの掛指を形る皮毛の変ゝ式ゝ有て同の
会義ハりさゝきい意ハ二ゝ五あれゝ句続くる
も出る句巻題句者と並てる変格もあり必氏を
示句をゝ人ゝる男鞍の変あゝ掛指の皮毛を伺乃
変るあゝむ拍宗通の紙ハ弱の合言を述るのゝ
ゝるを句ゝ出る毎ゝ接る付れの法ゝ乃ゆ巳臣貢の
ゝ変ゝるのゝ出ゝ対も赤戦の陣ゝを立て渡ゝ句を返す
字革もあるゝ祖沙の冥見ゝ出ゝきるゝるゝむ
変化の不向五ゝ世ゝ接合去逆の接あゝ弟
ゆの法式ゝ無さひゝて出ゝきるゝ

連歌ゝ去逆を立ゝ変化ゆ乃れと弟門ゝ茶お
句を拵ゝ的法ゆ乃ゝ従て古式ゝ頼ゝすゝと
其程を勘彼せゝゝ作ゝ情ゝ弟つも用の式ハ
雲秋去去ゝて三ゝ乃ゝ及「夏を二去ゝて一ゝ乃ゝ三
ゝゝ冬ゝ出ゆゝ一周い面ゝて五去ハ故のおも
れ除様石変のさゝゝそいゝゆゝお好のゝ出ゝ
法を彼ゝを乃て出ゝ其余毎神世歌無乃
出ゝもあゝ生極名紀ゆの多ゝおゆて必ゝするゝ
ゆゝい元来他沙ゝ森羅万像の変ゝ在て法界の
程を修ゝむゝ乃ゆれゆゝ限のあゝ程ゝゝさゝい月
花のさゝゝも乃ゝすゝゝの類ゆゝめゝ表ゝ風雅の
標を立て迷ゝの大発ゝを形ゝて其表式を彼ゝ有
ゝ其意を彼ゝい建門の意地ゆれい其れを初て
加減すゝき乃程之学去先ゝ代意を以て附ゝの
風味を出ゝ修ゝ宜ゝ去逆の部を分ゝゆゝい
直指門人の手記ゝ其代の使句を考合其程一

るおを正格とし例稀なるおを変格とし
まさしく出し正変ともに亟掇を加へ取捨法君
のまに信を置人のこゝに悟名の訂正を待まつる

□表のるす

[古今三] 表は神人哀愛を名取人名を連ふるに習ひ
こゝにまた一まの精力をそそぎ方々巳下の五句に句たる
初打に付やみのあるゝ目古耳古以を法とまる
▲表は連ふ所おを見届る新いあ手只目古耳ろ
おを表は悟て行ゝ流手を尽さむおゝ此ゝ
人名耳ろ女子古式は林るおを法ゝ侍多
[三冊子] 表の内鬼女に成ゝ就席に若々手其お教
加待るゝの新に用接すし句二ふゝまと改定
▲只古式を弱ゝ薄て出おゝ女字を連ゝ
塩浪も亦男字も連ゝむやすゝひく徒句を入よ
又地秋の鬼に成けゝめと忘れ忘れゝそ
鬼ゝ丹市の比おゝ平生おゝ生涯をゝ恐ゝる子

何そ仮鬼を作ゝ

△表は悟むお

神歌 恋ゝ 恋哉名 名歌新 武名 物女名
別名 供名 重病 重述懐 敷我早 怪法

△表は不悟お

•友名風流名通名・独早ゝ妹妙男・独述懐
奥独年育新・独病医茅・懐古非恋愛目
•非抄非尺非恋お恋新・旅おゝ京郭田舎
大名名毎名名市辺名お・寄歴小伎新・鬼寄物
序狐狸の怪おお 白尺ゝ巳巳ゝあゝ白目古下

△友名風流名通名

[三冊子] 土芳曰古今の人名表は生ゝ中いゝ作む
陸曰今の人名に悟む一古人のこいおゝりてゝる
しるましされる好ゝし人名
▲今の人名は常時名ゝき人の時ゝ但哀ゝ通ふ名い
ゝ「おゝゝる」は哀れ別字仙名まの耳ゝろおゝ

杜実ワ 時を待つ 弁乃 稚 兀峯
冬 三 月の三水に泛び造せて カ兮
英州 宋恒に掃部助を味入て 万子
杜 家あり祖父の刑部を孫て 朔式
冬 四 あり南度の古き ふち禾 弱
体 六 宋地に宋に典某の 望 酒壺
都 宋のあく戸に大納云度 定定
他 初留に拍坐う うの 木白
桜 九 老て元侍従に老を 結り 弱
八夕 ワ ろくも杜の 稿に 拓出 乃秀
鶴 三 雪村に柳足にあく 梅さて キ凡
匂 西門の昇法此さに文 て 祝已
雪村 男に教侍あれる風流人の部に入て杜と寺
コ八 四 西鶴に亀の尻こき 尻や 京辰
ひさ 五 月に付に打体の赤に桑に 正秀
赤六 若あく竹の林の 乎 巨 舟 浮水
冬 七 杜花を 多 る 矢 徳の高 正平

脚橋 ワ 雪に別 こる 望の百 脚 乙孝
亦 三 度内に 新の 始 末 信 セ て 杜に
杜 柳の名に 市 に 末 度 あ 有 已
八夕 四 踊 冠 に 庫の 竹 度 価 重
鶴 正宗ちやとて 初めて 生きもの 嵐雪
匂 五 石 に 笠い 嵐の 俗 考 庫 冷
、 六 下 男 に 市 英 時 弱
嘉 〈兼教代軍 概 兵 兵 一 百 拝 之
夕 三 武 稿に 佑 き く べ き 悔 足 え て 西 書
八夕 昇 蛇 う 冷 く 風 の 杖 立 て 示 弓
四 幅 教 軍に上 戸い 背 ま 柄 ー て 紀 白
十五 軍 兵 いあ あ と 北 方 に度 を 元 て 五 角
ひさ 四 ま き も 初 ち 四 の 引 ち 弱
去 よ ひ あ う ー の 大 に あ る こ り 風
白 鳥 兵 去 追 信 ー 平 川 の 乎 キ 角
杜 杜 風 ま き む 鶴 の 乃 列 才 九
一 稿 五 多 へ る る 昇 信 る 杜 の 月 、

其節ニ いつの月ニ為化物する武者一人 弱
冬 まもあき吳呉ニ月の為ニと 初芝

△粧法懐兵老翁女伝

法ホウ ロ 三法 指る 撥のを食 弱

初茄 何房か男 至て あくさむ 蓬徒

小弓 まカシ明くくと又ぬくをる カラ

他 ちいつけて 至のうち家 雪芝

年ネン ロ 他ていも栗のいうくく神 榛 相紫

七ナナ 討ふ人もあらを他て月独 乙甫

梅十 熟年ねをんるるよん男 伯桃

ムウ ニ 育の猟うひくく立 お 仙化

山ヤト るる士のあくまいもれ換し 向次

立衣 刃代い只 蕃 あく 長竹

コ人 ニ 女中旅るの後架う幕引て 重芝

八ヤ 子ようる女中の使 拔考して 風石

炭 祖又うまの大梯る考ま斗ム キ角

一格 ニ 姫すむ尾ワくの糸くる 佳風

ひさ 秋る 至て 月ニおくふ 陸花

門ホウ次 子い指ておく 杖の伊系 風垂

ヤハ仮ま〆指子表ニ出ニるいおニ又弟寸変極や

古格 ヒ 作るワて 仙技ニ入 弱

独ドク仙ニ 仙人の門店あれて月ヒう 都水

△粧病医業 七ナ及多伊者

ヒ 門連する 医志のそさ〆さ ソラ

対 某きそひの一点ニ のむ 賀枝

、 狗のいくしのちと考く 十丈

医ヒ 先の及つをすきと志し 和七

ニの 水乃白を 松ニりく 去芳

和苏 喉乳のあとの 粧ち文ま リク

和辰 豆の文の いるひ 西一 英ホ

弟 板の寸ってふをる 和苏

他 ニ 食物の板を干ク彩の月 コ風

吉光 一冊ニんの 保きすの寸 方木

山ヤ ニ 知年によれと すうある等 地飯

△懐古非云乃易伺

桃盗 ワ 河猿の美人ニ昔見る　杉士
蓬 三 二万年哀山ニ　斧て　東鹿
初茸 あふやニ都の名のゝ始されて　呉天
リ ヒ 古ちの先祖ハ弓張の月　楓里
冷 五 古戦場月も静ヶ肌　寝　嵐ラン
秋 六 古き代をしるぬりこめの吟し　嵐雪
やへ 三 気味のよき初着結ひ寝明て　壺呆

○

印 五 杉風ヶひろねの見のかん見ぬ　訳士
次句 愛ニ来ていひきを語る時参　キ角
多 六 さるの涙ヶ落る栃の実　翁

△非神お

冬月 ワ 乗りぬ星を出て指ふ空　柳コ
他 三 暦よむ人あきてる安くみて　米翁
なも 打衣のお目もりんと志ら法て　東伯
サル ヒ 深諸て　下されニ候り　ソ男
フリ 十人えらり名打行よる　千奇

乾 五 年の暮見る乃や峯の月　周東
岩夕 雪つんさ野りあさまの乃ろく　六く
天河 六 行るさる　雪の乃中　コ杖

△非釈お元德

柿十 三 尾をも見の水乃涼翁て　仲志
炭 高上降教を橋の鳴出して　コ泛
乾 表呉廊の除教さらしに流て（ウラスリ）　お史
、 おねる尼ニ佑をとあられて（アシマ）　キ角
流花 小坊主い今の後ヶ右眠て　喜侍
山下 ヒ あさまをられニ来る小坊主　山之
花指 撿挍成の比比乃　新（友）　角
深 坊主ひの先ヶ　主るし（スキ）　岱水
鹿 羌ん世帯ニ伯母の説法（イヱ）　栗ル
大陰 五 出ぬ杭もまられぬ框の奉加帳　東伯
十七 死住て剃髪しぬる草の月　香に
みさむ ハ 床てあさまきぬくと　そぞろ　支考
他 六 重ねて抱ふ糸豆の夜連　翁

未来　山のあなたの空　遠く　弱
白多　吹後の美てる月　少枝
なれ　り方も肌さう成て後の　何文

△非恋　元義
ふ　恋情を生する花乃情　京ふ
奈　みちんうつさす　蔭うて　以て
岩多　一　十りの店の小乃　地飯
アタ　人を与る辻乃拉下所　昌房
少文　木乃の高内を　合抜　弱
他　花人て百年を住まふ紙を文　張紙
、　扇の角を使す　翁まし　月麦

△旅公碧　京墨　大公名　美公
星月ヨ年難　唐玄日年　初君高の新い時也名と
他　旅の空公い菜をまく比ゆくむ　房
越　川一すちうてつつ　所　山之
弟　京へ来て学文する　たち　乙田
、　公久と　初河の行山家　賀仙

初茄　田舎芝居の　金色　色くく　蕪色
加川　徒居の高い越の白雲を　初記
笠　山寺内の足那を　林の月　楚水
花枝　秤さく関の来と　うえる　く　キ角
早月　初七人の作と　られし　友吹て　千柄
三千　七夕い時を　と　去来　て
越　九多と　ち安の　ちやが　佐内
天内　炊も孔を　めめ　庵　船　河也
花帳　かく　の芝居い　友吹と　住木

△無名の名記　名和
弟　少乃と谷七と月　れて　林因
天内　八京もりふい地分の　蒔上て　壹平
彫　花白初と　セさ　ク　至辰
、　かさう地を　れ　名記　叩信
山中　町の　れう　名記　自笑
ダテ　いさ　名記　内　ソラ
須　蕪の中を　く　記　桑信

杜 ㊀ 俵後表ゥ つくまうて 入る 六之
笠 表ホ 厚ゥ あひて 云 俵 寺支
誠 三 あく柔と 林ーき人の あと出て 页凡
度考 今ちんも あく柔と 尺て 蓋奈焼 生放
本物 ㊀ 河の下より ちきる 初き葉 比泥
大之名写懐古ホの 衍才三の中も 出ゥ

△不伸お

三貞 三 ろく芋ュ ひて と 屎れ 咋れて 低考
弱 ㊀ 禾の之 怖ュ るの 屎する リホ
保 古之 卅 烟る 乃の きり る 小コン
八夕 ふ人 捕 角ふ 村の 俵ゥ 乃高
ゼラ 今の 丑ゥ ホ ハセ の 雪 臣 呂杯
考 五 川 舟ゥ 雪臣 を く 眺 拵 有栄
力物 小仗の 後ゥ ひゥて 挾 第 年 鬱
冬 る之 ゥく 海ュ 凡の あゥすし カ ゥ
奚 六 露 葉ゥ ゥく たまる るの 血 嵐 考
かゥれも 皆 あゥ ゥ 拡する あゥく 付 般 をゥし

一句の作あゥて 徒あるお 好ュ する 事 あ 所

△怪お

拾 三 典ュ まゥ 程の ふ人を 下 て 弱
タリ 萩ゥ 鹿 狐を ゥュ 学ゥ まて 地 般
芽川 神 仏の 雷ュ と 冬ゥ ュ 面 まれて 林 張
考栗 話を ふ夕 ュ 雷の 後 —— 松 侍
十七 七 登ゥ ゥる あュ と 臭の ある 話の月 新 水
猟 孤ュ ワ 徒 交 お 忘い 去を 年 む 扇 考
考栗 粽を ゥ ぎる 忘の 形 代 キ角
、 ㊀ 三 伝 人の 忘を 臣 ゥ む 、

□㊀句目

本出 ㊀句目い 猪 ゥ 生 後の 句 乳い 狩 又 ュ 夫 切の 情 不 之 狩く
とゥふい 本句 掘 才 三 生 ュ 骨 を 拾 ゥ 所 と ゥ る 一
人い 兵 や 句 する 振 ュ 云 あゥ れ と 一 色の 変化 代 句
より 始 る 所 ュ 万 お 一 合 と 行 ゥ る く 拾 て 名 ゥ ま す ㊀ 句
目 ュ も 限 ゥ す 武 ゥ く 武 狩 く 武 安 く 武 な ゥ く

其句ニ其時の変化を考ふべし　下畧

▲句勢ニ力を強くする者は四目会釈をもよろむ
柔者ニ会釈を付うむ時は四ノ目ノ必起情して
力を入ずして一座梅カ香て其色成立ます〜ハ成ニ
大切の作ヶ又「強く」ハ起情「穏く」ハ会釈の様方
「安く」「ひろく」ハ熟句のゆくハ成ニやり句を様ふれ
ニ付句ハ五十の中ハ下ある句ニて書る〜

[養信] 矢後より四句メハ穏くする事と世も笑ハれと
只句作の程き事ニもまりて熟句を穏く様する事を
ず家門の作法ハ句作の程度ハ法てかまを其熟句の
程き様ニとんを考ニ成て句作ハ家後の事よりも
▲宮ニ熟句ハ表句の又立の事ニて考ニ書ニ
穏く又ニよるべく表条の穏ハ要心深ク ■□
ハ下ある句の中宮の穏ハ ■□■□ハ下ある句
の事ニハ句メハ程く句を仮て穏ハ又立
を程く様ニとあれ穏ハ句作穏き近句の事

とんの意ニ成ハ非ニ又四句目風俗ハ句を振句〜ト
おを振ニ成事の振ニ云ふ成ニも誤ニ又四句メハ
又外ニ付れハ舟をいむ時ハ後あり其ハ成ニ
五位句〜宮ニ挙る出月天神母神の四句メ生人よ
柿十　ハ　舟ハあち〜ニ又ある松月　七句

△五句メ五下の事

[梅巣] 八句乃内者ニ四句ニ者ニ六句ニ者ニ八句
を似句やうにする事　大概事〜
▲古式ニハ五句メより十句メニの体を宮ニ者ニ
句出ニ成ニ趣を事ニ一座の変化を為ニ其
事ニ宮乃変化を宗とする成ニ類の方ハ考ひて
制ニ成様ニ為ニ句〜ニ句様ニ成ニ
古式ニ制のかゝる如〜ハ様ニ

□程移

程移ニ系句を出すを待ニテ嫌ハ世の変ハし
表六メの句を表ニ付新ニ成ハ多れニ一つあく

仰　コ　おもひていまれぬ人を思ふ　翁
年　神　吹伝す杉も紀さすは　社　左柳
次ノ　ス　あれふるたの山い茂の　小枝
勾　ム　荒れて今い降くるを待て　ヤハ
根　名　戸隠の山下小赤の新ゑて　キ角

△祇園後表の角〻向頭不苦

小又　ウ　ゑ丘ゑの比〻ちのふんして　翁
時吉　ノ　去の口ゑ走やの仏の比〻と　山店
ウ　ゑく丹〻下す杖ノ比　、

低　ひ人ゑ沙をかまく田舎乃　去ゑ小
タヒ　ゑの信のゑうる杖の風　翁
素安と又い深も伝ケイ　信化

流ゑ　ノ　ゑ〻〻と度すあ小ゑ去の風　翁
ゑ安　ウ　ゑ〻〻〻と柳のゑ医る事小沢　、

ゼラ　川　銭いゝたゑを見ゑゑ　仲志
小　川　一ウあち〻ゑちく出代て　伯楓
谷小の宮ゑセられて花筏　り吉

蔓　ウ　羽六の帳を文う出ゑ〻　翁
文表　平ゑみて廿ゑかひこ絡ゑ　、

独　栗ゑて里宮素の庆百　千那
薄　丹波〻言吳の言紹初て　、
アリ　ゑゑのセ中をめゑ初れ　、

お　ノ　十五　ゑ吳ゑ吳れひつゑゑと　太大
日垂　ノ　三ゑ　歌ゑ出ても豆拾セ　杉風
三日　ノ　ゑて波の三千坊ゑ　涼ト
山天　ウ　ゑあゑい山の和尚の九お　柳白
ひさ　ウ　ゑ川い皆つゑ〻と明やゑむ　正秀
明セ　ウ　ひゑうあ〻平い春去えゑきちし　弦行

ゑ表あゑるゑはまあ〻す

□句差挙句

支五　系京ゑ挙句の接と〻六月後のてき茶俗神ゑ
花京　式い後云の会と仏式い哀称の席と〻時い大句
宗巫の本句京れい名称の花ゑを宗巫ゑ望むゑ〻独い
挙句も花あゑす只花を会釈小れ式い一度の発今

武い祝儀の切紙を巻き一ッきりの始終を潤ら
ニ云ふ拵るを今の仏陀に挙句を巻ての物ふと云て
刃を入て巻も掛す人も其花を立強て果に挙句
も云捨れとさるい一花の仏壇にて云式の花に及す
と仏壇にるる儀式の仏壇と云物事に成の終に有て名
字の肩に執きと云一ッ名に事る執事とも云ふ略
変て花に及す拵い後云哀物の句に後云哀物の
名称の花いまより仏用の仏に成れい挙句も句の
拵ふ事に其花の用を使ふ（きく）式に先実に家を
結て時ままき一花の仏壇は句に者の接拵あて
名称のもい事名あむも挙句に花のそ庭あれい
さて句の附に云ふ及す句に接合ぬ句事を
拵て伯玉新家の時宜ふる（きく）

三五 句の花と云ふ子句と者表に云ふ事の
会に中さる子未孫の仕方に云表熟に千句固定
に香を炊れ句の花と云し者表に云ふ

三八古式に巻ふに仏の其句を後て句の意を句えする名ッ
〈前の句を再用する句
夏栗　詩商人まを会る　冬朔日書て　詩商人花を貪る
句　詩商人花を貪る　仏像ふ　き角
、去朔日くれて　詩商人　翌　菊
句初ふこちゝむくを待方ゞ　仏むくに
及すちるをもの時ハレ、花の送ひを紫
其日　花名に仏と云ふ　山只
乃味一味に初る独活の芽　百何
句あちゝむくはそ紫のむちち　吾由
、方山吹に　ふ　桂物
あイや句や名に人を樹月　何
仏のうざも云に考ゝ柄　花フ
句初仏むくに及くい山のむち吹　杜吾
句——及す——ち　物
、ちれそ実に言乗の去　吾

仏字不宜

和苔　考陳　依角

小まちを来るとなりの雪　嵐七

白　考陳　又送れる笠の花　角

、　保生　去の男も為　子

麦占　白匂　ちるとなりて　やの茅のひあふ

白　――きむとなりの為

[考五] 二句一去と仰られる笠に又むをうりて式むを

いもむあれいきとなりの花の云用ある宮の花の有用

ある去と秋と夕見おさるく

△撰集考「又老」油句

冬　五九仙　白　猫風の為に竹高と仰るる　翁

雅や　とちるる笠のさんむ　ヤ水

■　白　水干を秀白の空茶やう　、

、　さんむ白ふ笠の風　ウ笠

伊結　九仙　白　科賞て金おうまる月又　翁

秋の嵐うー美為連立　畦止

■　白　花あれや西と又ちる寺内のと　考竹

赤き衣裂と沖の苗代　考陳

花に伊勢の茶屋の影ちるあれ　考陳

さし　三方仙　白　陸を陸さるれ山も雪の時　百乃

そまて拾うー光る雪の月　孔葉

■　白　五月雨山乃　杜の三月　考白

コハ三方仙の為金考の茶と白ちるく

青往来　三方仙　文月や厂いろはも未ちるす　嵐枝

あるーぬ星ちる出て拾ふ去　柳コ

白　厂と白ちるーち去の仕　来　松二

麦　十二考　文花の咲てや馬友三百里　芋二

去ちるするの去ちるあ　りる

■　白　内末て人も古栄の花と白　丁杜

、　杜乃山路も考の低路も　才花

△主客挨拶考白　七友多伊青

栗稗と之くもあるく笠の尾　翁

影の中ちーア西るま　拾　去知

白　厂ちー出す　ちるのクくれ　、

花括　みるや雪をうき〜すれ乃寄　弱
位乃む人乃袴よ反葉　呂九
白　盃の寄る濃す　花乃　流　会芝
、　蓂おあくるこ寄の菊　り水
他　盃良乃殺れねむる盃乃ゝ　弱
ちめてすゝきすの寄　斉寄
ウ白　機たゝむ寄戸る花の寄を焚て　弱
、　ゝき義流るゝ久ふの初去　高古
五九　五月白を集てまも上川　弱
乃る芸をつゆ〜舟　抜　一茅
ウ白　平性吟ゝい載へき琴の花　弱
お、　山田乃　枝を　抜ふ村白　ソウ
冬国　流〜や長寄の比乃弱　仲め風　弱
未士の芽とたる冬　柳　弱
句　丁の名彩を拓く各　業芸
七十　風原の徒をあくや時　寄、涼紫
拓の弓しる和のむ乃寄　弱

白　やゝやまて宿を送るむの寄　虫み
未末　あの手る枕と橋やるのち　弱
三七　弱る刻〜てふ寄の　以　嵐を
白　茅よゝ未末を植〜花の張　キ角
、　三人吟ふゝるのゝ〜　を
ウ　塊巾とれやゝき名人や山橋　小枝
陪る記〜と巾花さくつる　宇中
白　百匂の寄花をむる卜入　吉仲
、　小松の中る号をきく　反陪
八夕　夕ゝれを師るや寄る村みち　甚二
いつくも杖の橋る拓　独　乃寄　二
ウ白　拓さゝもちゝて夕ゝを
古今　七海や一字の歌を一字ゝて
白　震のゝ丹る伝る八来
尾記　九夕そよれ巳角お冬寄　寄川
形居　寄い寄文おの形の　松　此水
引白　船　犬を旅る伝の寄ま　、

笠　鹿ヤウ来てう但い稿すム　ウ茎二
そそのの花さく世界あもと　采巻
引上白　名古やそ至こ伎阜ゝ承就て　二
△立白い為仆そ題の白　ヒア及多者
青くてもある一きおを庵幸　義
保　秋拾　白　采五幷人うゝあるもひえセむ　嵐ウ
歌の秋拾んを白セうう
郭　日の去をさすうて郭の歩る系　キ角
白　連京加さる去を久ーき　峯白
只一日白匂こ立後不ト峡水似去朱ゝゝ
よも初会の秋とゝの後采を去ゝう
郭白　風乃一日吹てをゝゝゝ　固友
白花い今采の去ゝ　咲　掛　支考
、　郭乃匂の　柳　号　子
支衣　芝仲　白　花ゝや共角ゝ者の采る時　考
芭ゝ之の作去き角も曲ゝ員を芝さむ白之

離　月花や法仏の古社残ゆく　キ角
引上白　時人の離族集も花ん　仏化
難　両年去芝古戦の又アリ
去　雲ゝゝゝ弓ゝ之陸や柄ゝ　ソち
白ゝ土の焼ゝゝ似ゝむゝ　独角
、　大长刀も　柄ゝ号　子
芝　茸粉ゝ共秋球ー金采角　山リン
白　他社今人扁れむ吹て　仆考
、　面白ゝゝゝ月白　嘲ゝ　考
白多呂考　枯ゝたと号ゝたさて柄む　径吾
■　白　考の秋乃白だゝゝ品　枝东
东云呂考　時の秋乃芝ゝゝ八幡聳　涼ト
■　白月ゝゝゝ月ゝゝ柄鳥仏　俳水
、　号ゝゝゝ　ゝゝの芝中　子
弦呂仏　月ゝ厂ゝい小法ゝの居田ゝ　千那
■　白花ゝゝの八芝ゝ雲ゝて八乃り　角
、　法乃葉の附は去　風　千柄

舞茸仙口　歌くさ及まぬ恋の新ぶ　莫二
■白ゐとの花を集て弄拍　北而
、枝と笠とよりこうる　丁　子
コハ六月花のお　内ハ去舞行ュ白ちう

△布白と同他キ挙白　七ア及多者
一樗　ナ白の日や門提て白く咲ゐる　伝粧
東雲やに月ハ〆の清ゆ　清風
乙その後　まつ門ゐ　仙尾

艾茸ナ名ュ入て牧きュ入れュ伏ュ苗　百花
ひの花りふや祇園のお目ネ　九岑
苔の詳ュ芸大　をきる　嵐吉
寺却　ア次早撫子の原や歌の外　三性
ゑ〆てさろと脇ゐる花角力　如回
されも及いえ四ゐ初内　天宝
作秋　ア幻の中をそくや竹の杖　千柄
依帯悼　すて出しき出う　恫　冠那
自分の陰の花ュ寺かの花秀　方ゑ

、去ゐ子のと雪ゐ丁をきくハ　砂林
受菅ア拾尾ュ米ネ子ゐ　岱水
墨の付ゐる古きふとん　リ合
自七ゐ〇も浪ひの蓋ュ内花　杉風
、今の内ゐいえの苗尾　依く
艾茸ア尻及ゐき妹ゐ国ゐ　秀和
神ゐ月ゐうをひ家ュ　嵐雪
去作の名の考ふ　枝　舟竹

七ア及多者
△雅挙白
花引ュ月雅挙ゐ子あュ挙白い終ュ作
方ゐれとも雅の変格ゐれい付俗ゐるもあュ
ゐゐ　沿木を作て古き意をえむ　弱
コ　美ゐゐ色をゐ母ひ宮在　ソウ
市尾　白形をめれゐュ地名ん　麦　支考
、役ゐもやゐの衣り粧　お　去来
雅　大弟いさひき床のおゐれや　岩弱
、　扶枝をさて拾古さ　又　キ角

砥コ　ツイ〻ゝ宮司ゝ姫ゝんれゝく　夕兆
　　おのゝやゝゝ来ゝる　呂風
む掩　すり汁や色の由を入て　俊石
　　色彼ゝる色い木ゝの麻衣　翠風
一掩　他社の彼り志ゝむゝ新の面　立志
　　素杉足ゝ立ゝ合ゝ件ゝ敷　清風
東古　加紙ゝ森ゝゝく尾あれい　夕市
　　ま〻ゝんのゝゝゝく寿　英生
長う　三弦ゝ度のきゝむを弾き　伯楓
　　風も作ゝる代の畑ゝ　リ弓
かれ　干ゝ物ゝ蔭ゝ来ゝる　面ゝ　壹平
　　ゝ井も寄ゝ不整只　涼之
ソコ　何も寄きつゝらのふゝさの明ゝて　文秀
　　ゝゝあゝふゝも風雅子　平
反ゝ　打絞作ゝ世ゝめてゝられ　素民
　　ゝて丁ゝと丁ゝ方ゝゝる　失放
枕筵　夕仮ゝ否ゝゝちゝく代ゝ　青吹

物乃れとて生い態ゝ。　抑士
笈　新付のさゝゝ似ゝるいさゝゝ　考
　　あゝゝワセゝも雅ゝかまゝぬ。　正秀
射ゝ　ゝんゝ不ゝ生ゝい明めゝ　宗明
　　面いさゝゝりとゝれゝゝる　十丈
　　ゝ　牧壹
浪化、　出て足れいゝ村の後の新の乃　小枝
　　風のゝゝやゝゝの口い　浪書
文操、　面舎のきんをゝれい茨木や　乙由
　　ゝゝ有ゝゝの代ゝゝ　光純
夜実　明ゝも天ゝの高ゝゝれ　素秋
去　ゝもゝゝゝ見も多ゝゝゝく　リ風
　　ゝ　去面白き　山口乃　加弓

式二何ゝ今一百ゝの後ゝゝ不を雑ゝゝ
△峯句ゝ始て三京和を不生る
付日峯句ゝ始て和尺悲云乃名乱他キ主の京和を
出ゝ寺ゝ付ゝゝゝんほの会秋ゝて無ゝき上ゝゝまゝ式老
ゝ何ゝ出ゝゝ求ゝゝゝ足て却て拙き所ゝゝゝゝを

世尊白毫をおておき陳ねをあきらひ給ふの意おを
付る人あり侍るべきなれ但神祇制のおもや
冬　考〳〵繁いさむ我のうと刈　カ弓
彫　れ灯〳〵〳〵る神位の梅　手
印　祇之の雜奏呈ふ神位　コセム
アリ　さて〻白て　お度の梅　手
式の尺寸を名和他キ教の侍に南氏拂するま
さい京り東式あれとも神祇めてたきおあれい
弱のて宮まて許されをむ最おこ侍い弱の仮し

□先生を続ま白を用る侍
キリ　白生あ〻〻一つ〻ゆ〻るあきこ心　弱
子　陀羅の白を考〻〻去　杉風
コ弱供れ西ム土白あるを後ま供水杉風西
ゆ〻て力仏一巻とち〻白し
初茶　白梅の白り〻今の竹多　東花
さまカ仏の法
日も入おの岑社号　十余

とあるを後芽二成ま後ま知られい
ゆ丁も品生相の丈あれて　芽二
と分ま〻東花芽二件あれも先人と考る成ま式仮
あ〻仏二仏を〻て又一おぬあ〻〻必箱をおむ〻る
おの〻

□本的法乗　カ仙八会下

[朱]本的の大の丈神の名を白面ま仮彫すて
宮上の法ゆ之名白中ま含てて仏ま人れと
変化考〻中され〻〻仏白弱芽を表て白ま〻
丈神の名をもむ〻いるあれい法ま悔るや此白弱
神勅の宮之法法ゆ丈ま次て仏後ま〻ある
成ま揖すま上も揖するのと言れ〻〻と文的
世伝て名を考いあき成て接拂白ま雅名
を作人るゆい法度あれと神仏世伝とる
かま〻数ま仏名を唱ゆを教とすれい仏後ま
〻〻て神面をそ〻る成ゆて〻あ〻るむ弱う
考ま仏あるゆを仏後の仏社とて仏を悔〻む

若菜の不審宜あるべし

正歌の句に句続の孫をもて仕立る句法

何の木の花とも考へず匂うか

▲こは慈鎮作の歌と天とあに地花とあに咲句

あるべく孫語を咲て作るべ神祇祇祇の

んなる孫ハ神祇あるべてあるべ句ハ二句

あるも一句あるも又あきもあり考へ釈義

畳されとも考へ〳〵伝〳〵きるべ伝む〳〵伝

句法也とい考へ考へとり熟考るま

とるべきぬあるむ又れいずとして句ハ相切て

孫す又考へぬ自己考へぬ天然之実神恵を

序むあれい考へぬとつくべ先也又何と終る時

い句ぞもと孫ふ格之そい花を足すして句を伝

むんあれい何に終句と乃ふれと歌して我ハ

孫をさるを又比考ふ考へとふ考へとに詠きべ

あれいるのるいあるもそれ相切いあき宿べ

又宿歌の句に五音十声の連て作べる

松風の句ふ彩宮。漢乃宮。

さあさやるま。m多皮の草。

むつ〳〵き。新赤老。極りて

正宿合体の時に上五字を通考へつり下を連声

もつり又上を連声して下を通考へ仕るるも

あり上句考へさる時のるとあるべ〳〵たくて

猥へれ。まと。めさめ月の宿ヶ家

右三ふい孝納法乎へ作寸行禊菱垂賀之後

務院式通考連声あきを用す玄連声大古の

格へてつり〳〵〳〵 文約

▲是皆当流のさべ在つまい只孫語流 上三云 正歌の

かへれあきるかい下の連句へて考へ通へ

けよおあるそいまづれ用へて求べる作あべす

格句ハ句の孫をひくるあれい上の孫と下の婚と

通へき孫あ〳〵さるを孫て考を合もひとへる

時に都て其印相印まの種あぬ作とあくむ生
をもて弱い古法を拵くれりむ主度おぬの人
ゐて拵風のをき老拵をく徒とくくく又氏
那の白も上ユ三ヱ氏テトヨ弘氏ようぬ作ゑ

星月 奉納 花云の白他つユ連声を用ら人あり連
声い五行和合せす我流ユ通声と孤徒を用ら

▲ウヤムヤユ音声い大古の格氏宝ユ他つ音声を用ら氏
其音声氏の。の子あれる五言も十句も作ユ
巷ワの用あぬ今注ウそ的ゑ

仏 何の木のひとも言れぬ白ゑ 羽
イセ
声ユ彩日を含む 号 三光

尺 ウ三 門和あゑ田の中のち 羽
、 ウ陳の伝ユ傳のまりて 定

白 復冊狩す 神恒の去 功人

雪花 磨立す 徒も は〜〜拵む 羽
アハタ
石〜〜 庭のをき 暗 相家

ム 和 氏 恨の甘い花の名ユ考れ 、
、 世住白をゆるつくどそ 羽
氏生ノ杉白和 依年納ユ秋言庭の伝め氏
ヤヘ 上代美 末日い神を友ユ友ゑ年 忌 羽

雪ユ五五の供お納ら 示右
白言白ユ雪花を足ひむ生 京北
末日氏陳あき拵上京を四の民の供お納ユ
末て彩手彩する伝ユ〜〜伝氏ユ生ユ
五言十句を用ぬを足ユ下の伝も同一
三日 宮爺 神も言れ高を山出生白 支考
雪花ユ舟を友の四あの 林角
尺 ウ拵花て三〜ちの むさう ソモシ
ム ノ八十て死ゑ人を〜〜ゑ 陵巧
白五作ら恵の力仏ユ垂ふ神のむ 考

神風鈴
カ 力 ゑ ま る 磨 ユ 恒 の 寄 ま む ら 角右
風白庭附ユ あひく苗代 陳ト

人丸の以歌をおもし
フリ　是非行の姿なり千や大和物　涼ト
来迎う柳の上をてる月　呉色
かな　家の笑も拝すや神の杜　松竹
おもしろき去の門かなし　路笑
神風数已下三之巻白なし
協協も末社の数や定能　素役
秋い秋となる　嵐　風　笑
白数乃新　神の志ヌ家の花　、
狐ヌ雛の菓孔胡々子　喜翁
日待百句
引首　ひろき出合い家家の月　旦水
日待より子共修の神待　岩翁
、果抜のつくを虎乃身の葉　未佰
法云　天神来納去い才三之ヌ梅を出他きなる老中ヌ
必梅一あるへし後去左近舟承す派守未忌む
梅十
才五　去良天神来納十方仙内
意多おをも舟ヌかきなむ春の月　梅光

、才云　あられ次第孔舟の秋風　、
◆哥仙あり後去左近い怯むて派守ふい白ヌも入用
なむ家おを舟ヌ入又舟承すなるい子生を足着ゑ
艾列の旅払舟のこなす乃ヌ石いるを忌条を
条らい来を嫌えむや旅人なる年い旅字も依る
まし都て已ら悪癖もて神主をむるい悪る合き
るそうし
□愛敬用
法云　懐帋一坂読終る時足より瓶用示引出する法之
義の神仏恒なるい艾意只何となくえ時い天神
の以告とて天神を祭て表わする中古法之本旬
神祇なるい探神祇ヌすへく去秋秋を義乃人ても
義の季ヌ陰ふる句法都て無念無想より探して
一巻清浄ヌ挙白あるへし老中義枕法左近来を忌
才三之巻震書家竜来のもろきおらむ西を忌之
◆震巳下の説非なる中達句ヌて以く
表三八　御　去之探吉之才三字並之愛敬数句

あり〻おのの〻ふて又句〻ふて句作〻
但作者の加字を用ゆの加字をいもて始
▲作者の格の加字の不伸固の法〻
三ア出 本句あり〻表句の法 春丑の句 法句あり〻
表七句あり〻〻句あり〻〻句の法 異の
要りの法 法きて屋〻表句も同
工本作 長句の字 法句を入て時の引上て句〻〻変
丑の孫 法 不安季の句 法句の孫 法句の弟キ法 法
不法句 安季入て句 本句の弟キ仕立 孫の法
春丑変丑の句 三句 法句 なし〻〻 句
〻〻一字 法 或の句 伸 〻〻〻
▲神 法 変丑を孫 寺 寺 法 今掛 法
変キの句を孫 季の句 法 三句 句 伸 孫
季の格を彼 むき 句 法句 〻 法 異の
句 異の 句 法 孫 法 句 〻 法 異の
季の孫 伸 〻 又 法 法 句 〻 句 法 入て

句付 伸 眠 目 句 法 十七字 句 句 文句
あれ 共 伸 図 法 十三字 十五字 共
余字 句 文句 〻 〻 〻 季 句 雑 法
も十七 法 句 伸 句 〻 丑 法 文 句 法
作 法 句 前 句 文 句 破 也
コ人 雑 人 盃 法 敗 も 変 や す も の 閑 御
不二をお手 の 句 日 の 九 伸 狂
式 法 法 法 法 句 〻 法 法 法 法 法
三句 万 冥 の 只 草 茶 の 惟 く 、
門 の 法 句 の 久 法 句 去 仙 行
爰 法 水 仙 や 爰 法 〻 〻 法 法 法 、
法 法 法 〻 法 法 句 法 法 句 法 法 法
有 伸 秋 の 秋 法 か 法 る 伸 や 秋 の 風 、 行 雲
行 田 の 隣 の 法 句 句 ふ 比 帝 因
文面 法 略 旅 法 句 法 明 も 立 法 句 て 芽 二
関 い 夕 日 の 出 舟 入 舟 。
又 句 法 句 月

九月の記之ヨ明も芳村て
雲たき分るもの〳〵面の後
此後の一句おて貴あり白作ヨ用とふ用の後
あり用を考すて白作を好ヨ定め方
や此後の稿者ヨ候の字い白作之此用とか
本句ヨ作の一字のみ対あれい稿いを寄して
候とそ〳〵きい稿分を直むとて明の白作い共
用ヨ白ハ面抜をヨ会秋の白あれを後
あれと出舟入舟の作き用と雨掃分る能
ヨの用と此を白作い行分乃之野

十九月日　芳三

帝国塚

宝暦八九月芭蕉ヨ芭の変あり
人〳〵告カ仙ヨとて小孫呂ヘ伝ら
笠琴　山ヲセや杖の乱向い抜　よ
後の月　秋の明し　掃部　行柴
白みるくき明を文る白　今宮の花　宇口

三月出　変抜を宗くい南方の行徳笑俊の人松
あるキーきヨ宗くヨ云ふ条体ヨ重像を後変
不孤牧茅甲ヨ乃乙方〳〵変抜ヨ言ヨ掃て
家直方ヨもする之一次所て一京の面代と出て
するもあり又方ヨヨ契代ヨて一次を付るあり
何レも芳てる時い候付附ヨふを掃ふ
条留の白ヨ変為とカナレキと浅きヨ柳ヘ
夕マヤ　ナキ　とひくあ〳〵

△日賀

一　梅ヨ二月中旬初花　翁
天下のおん方家ヨを去　杉風
面白ふ古系行くをさきて　仙風
あき麓ヨ寄ヨ行くをそ白く　うめ
雲方より赤ん為のかのくと　面代
谷の戸口ヨ〳〵る看板　風
上ヨ吉ふ内の宣ふく風　而巳
ふりの相も今宮の秋　孝

ニ、 ハ裏ヨリ今モ見ヘヌ程マデ 山リン
三月六日 ヲアレハ月ヲアレハ ヲ夏
神ハヲアレスモ住ル陸ル 廿三二
ナミ秋モ 杉の 暁 リン

カ仙六下

□匠呂

三年匠 匠呂ハ巫玄才ニ古ヲキ不易の句ナリ一説
是才所友初識陸士義士ヨリテ名ヲ白ヲ
天下会乃の素芭の匠呂ニ名もあき去の匠呂の
ヲ神ある間ヲ形秀を抜むを拾ヲ宮移ヲ
松風モ一そらわる城若むすおとして一天下
果ヲ依ヲもうあきあるて哀ヲ 文約
五老の歌ハ乃世の祇ヲハニ云古の稲を手向むい
伝あきワさも今ヲこの葉を見ヲニ 匠悼懐旧
芝狩秋詠の見ヲめもあく或ハ白鷗峯の乃ニ
郊子見の句を用ヲそハあ歩ヲおく句ヲ俗令
出哀の句を作ヲも一句仏社ヲあて論ヲむ

只寂翁を之とセよ白ニ白ニても二句ニてる引ニ
てもヲ一句おヲハヲ白ヲ一老中「神行
釈会乃才茅教生房依句字余送字ホ
古式ヲ姫ヲもあヲ若乃ヲ作一ヲ仏
冥途 罪科地狱阿責悪鬼のさヲハ怪ヲ一
艾余ヲ人ヲヲ序ヨリて楼句もを意も
あヲヲハ匠呂のヲニ作ぬヲ

拾 艾客ヲ枯木の杖乃長 翁
大重尾岸 衡 朱ておくヲ恒の他 多葉
若翠

六月 声矢一き会仏少四ヲ
十 むりヲを ヲ丹一陸の坊 ソヲ
尺五寸 五 若生一仏の孫を拾一て 翁
九 家ハき会云の傍の戸を明て
廿 仮ヲる八者の対ホのヲ 友五
八月 投ヲもヲられて冠ヲ反ヲ 翁
ム 白清き地ヲ骨を埋ヲ花の俵 ウ
非尺 、 去芳て四く秀の一時 象

白 笠ちやそもぬ笠も去の面 菊
寄物
白 花蕊庭伝の蕊に れおて 紅葉云
白 亡々を笠に傾寺や枯尾花 キ角
枯白 弱ち 傾ムさめて 芽ぶる声 支考
茅 ウ 風の茅を垂こうのむ 伝
法子 五 盛すかと舟の豆ふをやとする 乙彩
叡 土よりむに集の布白の惜るし 千月
神 二方 あふのるすに 秋しる 伝 万り
彩 三ウ 名さしの仕合ワろきれの去 去来
ムル 尺 、 孤よもや中も 去のふ重美 北去
引旨 只さぬ快の おくに戒名 考
庭 、 青天よちしやくむの芽しく 来
式芝 神尼 医字八不あり 已下 はれ記さ
式芝 式芝 仮や浪花を東の端 納 杉リン
、 伝く外ろふ冬の日乃月 子サン
白 ムり 紙 伝しる 秋 風 千川

白 尺 花いおのつるる花微笑 伝子
、 笑を結て 新 霞 ろう 除 伝
、 赤 紙やあ はれの木茅 撥 コ去
一 ひさしき 去の 新 多 茅 新
ウ 中 ろの 光いろ地をろ 死 ソ中
白 袖に今 所の好めろ花の枝 リン
、 鳥 ろく中に 京 東 独 ろ ろ ろ 嵐 雪 リン
向上 仲を 雪の 内 本の 風 ホ
庭 三ウ 衣 形の小 袖 庭 雪する 仏 主
忘 三ウ 忘 ろ に 内させておく月の 間 リン
白 外 考 ぬ 琴 ろ を 等 む 花の あ
、 茅 茅 し き 伝の 交 撥ル
り 快 風月の 表の 紙 を ぬ し ろ り 乙彩
、 賀キ 表の 地 京 ろ い ま す 角 多 本言
ムル ウ 杖 笠 仄 陀 い ろ 一 世の 夏 、
ワ ウ ぬ ろ 神の 光 ま も 迷 ま さ 彩
白 乃 手 の ま ち ぬ 花の下 言

向笏す歌の数や　梅花　小枝
白　去も来う　佐つく　他　伝化
沈丈　されい社松いむ　ひよ　飛ュて　百子
白　のくもそまやす　百の去　林石
後撰　青柳ュさぬ古枝や百ケ日　千川
、　丈個地乃　蓋い　角紅　松リン
引首　風雅そ人元ュ　伝う分　、
翁　十二月　防面も　ふ寸　哀く　リホ
、二用　ュさを　含む　市の　泡ュ　佐ホ
白　ちるむをめつュ　惜む　花蓋　リ
匂　月寄ュさ　れ　れ　孤衣ふ　許云
、三位　小まるの　後の　芽まら　リ中
白　丈きさ〜き　の夏の　情界　子
冬菊　枯庭う　采れ　ら三　巻ふ　袋水
、七位　墨の　分ら　る古き　ふふと　りれ
初　翁り　師の　附　おりひ　ソフ
教　青のそ　花ュそ　ら〜そ　検室　依く

おおりの　夜　ぬ〜す　或去　石菓
白七夕も　伝む　の夏ュ　因む　杉風
、今の　去れ　れい　元の　芽尾　依
成　ま〜と　ふら　時ュ　ュ七　同　式部
ュさい　木の　ュれ　郭て　ちら　千川
白　ま〜ま　ら〜　花ュ　丈　笠　丈　衣　文多
翁の　庭ュ　伝て　袋ュ　中ュ　新の　付白　あら　門人
呂丈　名狩　を忘　寸時　ュ除　て　笑す　云出　ら　ある　む
伝化　庭ュ　水仙の　花ま　る　佛う　多　文考
百匂　日い　き〜〜　と六　ち〜の　素　杖坊
法子　ュ分　ら　ら門　〜流　さう　五条　、
白　た〜く　も　雪ュ　因ら　下ュ　ら　小枝
、　ま　を拍て　大徒　を出　使ふ　芸生
冬の　馬乃　夕れ　をく　ウ中
白　柳の　布白　の狩　る徒　冊　夕市
、　風乃　云伝　出し　芽の　宿　元去
あ　の秋　す〜〜　り行　新ま　イ吹

白門去のもと陸世を去れて　孫走
、人も陸ちて糸も陸ちて　李
、多一叉林う去くけく　百子
去をひくけく　月の去　八宗
引上白　移逝形枕　ちのちる宿　子
、冬牛や何れの隠を君う宿　水去
みい去れれの去きけ方　揚東
秀白　何を鳥のあの拾ュおく　昨古
引上初　山世ちもひ吹弱る徒五　聚之
白を引去宮武おの白ょ伸れて自米ュ子
、世い拾て伸るれおく石弱ぶ　可夕
月い去ょうと祈る去　弱　キ邑
引上　徒五人も去れて面ょう　波豆
、云生を起てつくれふ大徒ぶ　李れ
艾きさきの柳去ょう　国去
引上　花い拾ょう弱の弱ュ山　方泄
、あちょうき世を号とあく　去水

奥　白奥の実面ふき形枕　何史
、　序舟い英ュ序風　和　李
山集九余老中の曲吾　拳ュ四く教を集ょ時
才白猟ふもめ山去ろこう　めを拾ュ去ょう
タリ　いさよひや陸の新去て十方り　白紀
支考宅名　変化の時を去ょうあく丁　右範
白花性をやめて花又の孫太文　東羽
コ六年代の曲ュ支考ュナ名あり文を度て記を英山
ュ陸ふ山ふを陶朱ふュ流ょう
、　廉の去ュ云の去ふ　人自秋　陸者
ニ秋ょもあくふ去秋ょもあくふ　酪皮
白古人ュやくの白和をふる花の付　巴兮
、　杜丹去陸　夏の鶏ょ尾　牧を
柳芳　艾柳もちょ日とありぬ一ち　君仲
大川峰　陸ふみュ移くふる去の　喫　仲を
白系冥の柳もくもる去の去　、
、小田乃性もあくちのよ　子話

名月　新の色さむしく　紙の
高白峰　は葉の秀俳句　幸庵
白　花ちの梨ュ拾へと　葉乃
、　新ゥ布や対すの拾ゆき　水花
名い水の和乃拾　大　若生
白　人とも勿信九の後乃花　仙翁
、　月ュ又えぬ秋月ュ又ておく　日入
行仮宜ゆるゥ文月の月　哀ゆ
白　仍井ゆい白きを後ュすゥ　条次
、　七夕ゥさす　ゥ　るりの　凋　重
十七向　艾人の侍灯泳を花乃号　致百
キ角忌　六子余日ゥ寿後る水　後く
白　むそ昔今又京のまゥみ　孫舎
、　花をゥゆゥも角杖の音　大主
八幸　ちれ。梅名い来代ュかゥく　葉葵
垂位用　爰と杉菜の元術てめれ　位ュ
ム祝　ちと後生油乃のあめをのむ　乃り

白　あゥく古社ュ移て亜のむ　深風
、　ゆゥもゥ。今日い百　風葉
艾湿　移近ゆ多ゆ。柳　花　後所
七ュ三向　加乃ゆれゥ義の号　美ま
ム　ウ姫ゥあひて明く移ゥる　以拍
白　ムもゥい湿ュもの むくを界　、
、　ねゆ人の方の雨も移ゆ　巴形
湿葉忌の地葉も五十義ゆ　葛件
新葉の曲突ュ永き一附　ま
ム祝　ゆ重夏も月ゆ老ゆュ乱のゆて　一ゥ
白　三ゆい芳ュもの　ナ尼し　ま
名い雨井ュ去の四く竹　姫原
嵐七風ゆの云ゥを医て
名崖　四く雨の地も空の花地ゆ　和葛
惜も去ゆゥく秀の入お　十知
白　ちる花の崖ュゥも法の声　風葉
、　去の名待ュ友も考ゥく　只白

星月　泊る宮や少斗の星月夜　宋松
き角世三　はるゝ〜にいえさら原　松何
白裏〜乃を咲て〜ふ乃む　松探
、花をうそへて拘把の美家　千柄
ミゝ　伊や茎茱ゝて云名尾　梅尾
ヤハ峠　残る居士衣も去の去悼　夏月
白　寿のまひこる譲　恍　内
七〜　号やつ〜〜松も西の号　杏西
茶烟止し去の跡家　め風
白　夏を去ふ一木千里の夏のむ　竹壹
百〜　尾ゆく家々有も若の花　三紙
時多ゝ号名すきのわ　祝〜
引上百　信花の花の力も失ひて　祝信
△匠吾ゝ白あき侍
切状　風を西て拾ふ恨のちり　祝重
コハ百　初雪や侍の茎閉ぢむ〜む　許云
小号　務よとる舟のおやあくみち　宋智

冬蕾　冬の乳て公のあゝ茱ゝ五六十　り合
、　くことそ忘い月又十二て　杉風
夕良　白や茨ゝ侍きき房の泉多　俊〜
白ゝ　其外や附西て更ゝ一昔　小枝
猿ゝ　こそ萩やんのくるくむさう　ま路
、　多芋すれ風の芒茨仁年おそち　嵐雪
、　多向ゝと茱の白乃咲多〜　木十
秋郎　亡ゝ仁伺極てきくむ秋の風　客庫
コハ只一老あれとも白あ〜れ白を暑すると教老
西号の附其中ゝてすゝる可ゝ氏おも侍多〜

□人倫と人位冥ゝ忍あるゝ可

吉今尼　昔の祇社も今の仏社も御戒の位乃
明々多〜ぬい姿情の二ツ社今ちさる有く
▲去姫の地位ゝ甚つゝ姿情体用の忍きりて
万法一理の法式を定さるゝ忍の左世も亦三
位の花生ゝ乃ゝ氏歌あ〜て作家另〜〜

まち中にも人位屋い仮令面ち肌次といふとも
又るゝ所ゝの使ゝ「起居又世の間に拠て人の拠
を多き居あれい右勾い右勾ある〳〵人位ゴハ有寸
と云ふ事あ之ゝ人倫を二句去と定ゝるゝ「」又
母ハ男女ハ目立年立てる文字の釣い式い自他の
使ゝ分ち式い姿情の連を考て打戦の付んとあ
ゝ人位号い似面ふと一連の配い変ゝ勿ゝも
▲起居又柔文ゝ父母の上「」ゝあゝ南句文ゝ初んゝ
翁ゝゝれいかく入代て記すか又ゝ人位屋人の拠
人位号ハ皆人ゝ寸ゝて二去の人倫あ寸今
ゝを人倫号姿情用の五ゝ分て下ゝ注寸
式ハの去い号已下の人ゝ寸い仮令似面ゝる事
ても付孔の変ゝ打戦を注セとの間ゝ
拠い古打の拠ゝ主推刃独蝶ハ教い只人位号寸
人倫と定ゝ寸式号ゝ法制の変強を考ゝ
▲式五教い之ゝ字ゝ人位ゝの属字ゝ有ゝ古

式い人位と定ゝを蔑ゝゝい伝お教を注ゝて
仮ゝ号と号て人位戦を注ゝ寸ハ法の変
ゝ示ゝを拘ゝ寸ゝ法ゝ故く

池白畧

△人倫二去

父母男女　式ハ人位凡仮ゝ式教ハ二句ゝ去ゝ
▲式教ハ教子ハ方　妖聟　男姑　祖父　孫　兄
伯父　伯母　甥姪　義母　ホの六教九族の文字ゝ
ゝゝ傍名　俗名　呼ゝ　ゝ人名ホ注寸式推
する打の中ゝ戦ゝ蝶打もあれい注仮ゝ足ゝ
蔑門ゝ人位二去ハ古式ゝ教寸白面ゝ人の働
の有ゝゝ拘寸只教字を蝶ゝのゝそゝゝれ
六教九族の字教い五ゝ月立年ゝ有ゝ

△人位号戦不蝶

主推身独蝶　式ハ人位号ゝ指合ヲ化カラス
▲ハ古式の文句を仮て蔑門ゝゝ式教い号と号て
戦不蝶ハ「をまきゝ述ゝゝ文ゝ式文簡古事有ゝ

古来氏氏姓のゝ人位とせぬるとんぬ連氏五
字は数子の名れを含さるるみを考て七部の
位名も家い人位載をて注て自る昔の付句を
怪めり今是を解一貞部を分て注句をあつ
人〻名字の逐雲を払て明らるあせよ
手トハおを立ゝる人の仮は上ゝる一字之君関白殆
云改妙ホの友名傍友公大名をり代友〻表
神立坊立名立仮立表又帝倘表医官
宮方公家方後ロ戸中ロ雲局奥振内宮
後京方丈位打西堂納和尚居住仏居ホの
居和名あ又無名法治ホの姓名表ゝ古人名ホ之
誰トハ男女を分ず仏く他さ元仮字之義老表傍
尼人お人按人仏人表客友仲名き底連同士
之付ロ心字合此邪あるさ先生表ゝ表ゝ表ゝ
民る姓殆奴丁雅歌ま方仏又許ロ1ホ表之
身トハ自さす仮字之我已某私拙ま表自

対其氏方ホ表之新法一も氏中ゝ入
独トハ人数さす仮字之一人二人爺人仮殊軍
多勢聚集屯集底生ホ表之
媒トハ媒妁をして号る者の仮字之仏陀医陀恵陀
仮陀表仏好嫌好仮母表糸妻孫妻表実友
芋友表法打皆打表曲表る無表大ユホ拙た
友石切日用法機名表ホ三弦行名案大表翁
法表表表六表吹れ乃人拉り仮系後生表表
宮司社勢神官表武士侍小性供を出代表系を
代書又腰又表使表称を乞水仮田ホ号卑
六尺表上ま下ま上戸下戸会表食稼多ゝる引
る士表大力英勇仮房表仮表仮ホ表頭博
太表打を表表拙ま表一氏表法白多元とも
一仮ワあく。下ハ人位・下ハ時白仮ゝを出も時之
古尼天ゝ天女帝仙尼表鬼仏氏表古式ニ
色々説アレ氏人位ニハ二百ワ去ヘキ之

▲只上文を自指おき連あれい支考仮名の使を示す

全 キミ 印

出生い殊更君の君保き　小枝
待う待いやうく　そもおき　ソラ　蒔
初花い万葉因る時あれや　蒔

枕、

君の代い俳も扨す風の神　壹平
四文に移るゆいおきゆ〜ぬ　リ和
泉ひれい嫁もきんむを入る来て　柄因
ちく日も石の井拾う天女　法風

拾 位 友 印

形ある宗う法花も声　蒔
動く来て古位国コイ〜　ソ英
ちの餞にて笠うりて安く　享子
十年共へむの張ある益乃庭　コセム
抜菜一春を分る里人　蒔
お皮の系しほとやゆ〜む　壹芳
木ちくあうの寄孔タ人　風麦
麦飯を入セむと人の孕て　蒔
祖父のち刀きうすゆ　格士

教 、、 枕

青巳伏屋に生る名のうさも　風茶
兵戸々というくるの　稲　駱士
口ていを見ようん　俗戸々　和
うも云も庭のある拾ホ痛く　臣く
むり屋風うち庭の抑白　葵的
初なに世戸の歌子拾臣て　蒔

炭 俗 皮

又代ちるもすゆ信人　ヤハ
法戸の国俗を送る花蜜　蒔

白扇 大名

去るの古ミに房ぬ茶母　花フ
あの冬神に咲てあき　吾仲
一宿て五百ちく〜お大名　去来

文月 きり

きやるゆも小指をそす陽の茶て　六之
麦杖あれそうくに風　地飯
代るゆい拾くきけもこと　東和

宿 代友

西りの寄い村るこての月　ハ栄
木方の孤草に俗い秋そそ　牧青
代皮の杖をいうコと宜へれ　支考

稲　神立

神立の小くむ志ろの宮れ　立志
上志志る〳〵死ん昇る　信風
母歌の利口あと失志と付　志

雑　坂立　三月

月の宿三立　抜出よ　義
月よの外い皆坂立　く　志
ろを神も名す　笠　明
ろを　山リン　芳及
奈を仕ま聲を　志

上十　三月

抜ろる舟乃底作々り　杏皆
庵人の志れぬ河よ聲きて　千川

イン　桃後

奈　院も白髪を作ひひ々り
れうよ鶴巴文す歌乃月　雪九
頃ナの祖を下まて抜ろを　義

神ま社宜のさひ信ろ志　桃風
ヒ、　あ〳〵の山家れいとそろ什　ま臨
、　花山の院も振いろんー　リン
宮　布セいろく大塔の宮　岷幸
張花　家うま相ろ口のろ〳〵之　ま琴

菫　五京

菫　月くろ雪のよ相のろさすて　神多
口のむ姉のいうよ久ーき　相琴
意接をよろる姫の叫れて　理航
ち系てい　おうて　田巳　白牡
巴芳の度いい意必ホさくのあ　古之
老傳の連よりもの　れ木さ　事平
巴て見られいそ杉てんー　川和
庶度を庶用集を借よやり　茅花

笠　庶中

大江の長さ　去の後さ　菫二
出代もあれのとのと至えられ　和
後を捉ろ後京の傍さよ　平
口れ彩江表代の表れ叫れて　琴母
とこの使ら点も　笑　す　り月
么月の草よ後位も石州後れ　和
後位　後居　陽居い陳ホ麦の秋中　傍之

枕

お流の淫を立てと学連 友冥
格のふーんと思ひ出るの 冥五
ゆの長二寸伸おもひち芋 仙芝
裡をやめ時代ーーーき。 杖色
汁店と左次の味と冷そ 麻面
ちれおき変ゆと変を翁 キ凡
人あきとまえおをつきり 抑水
四ちいさむ金ふう 向 朱弦
まふーて赤版配る大井 反 集加
をーーあーるる乃姓の弓 キ角
日のをよん定る 淫構 ち 撥士

古 芳 字けく 義 弦の像 葉云
剛 白鉢と萩と墓をおり辺 め凡
院の曹子と於おをちふ 知足
、 抑芦ゆ ーーー板凡ろ ーー 侍柔
言白 白ーーと言寺 言の白ーと 扇
嫁。入わり出すちの様干 二川

古今 僧 古式ニ人位ナラストイヘ圧指合ヨクル(キ)
▲俗い仏者の西名そ人字と教すれい時あるるく
知ーー古式を拒めむとしてるてり十と支考の法を
ひくさーい俗名も字とナきを人位と教せーい
宝西 慈芝 ゆ 時 五 て 中 西 る 九 之

准 夕レ 焼 挽 の ー る ー い 徒 も 袖 め れ て 支考
西花 白 髪 む ー り の 尾 の 図 り 雪 位
又 連 る 解 の ー の め ー 嫁 り お 一 介
茅 乃 歴 の ひ ん と 尻 声 イ 吹
枕 式 中 ー 形 そ れ 二 本 わ ー り て リ ね
年 の い び き を の ー く お 俗 累 芝
老 奥 の 背 去 ち ま る ー の 老 ー 人 て 翁
サル 行 人 入 ー ー 小 四 門 の 俗 去 来
立 ー り 屏 風 を 俗 す 女 子 る 凡 兆
男 あ き 嫁 ら 笑 を ち ら て 口 通
二元 用 大 神 と 俗 侠 帝 を 本 す 翁
、 尤 め れ い 汁 の ー ー す の 背 ー る 友 五

ヤヘ　長老

屋のひさしに廿ばかりそこなはれ
雪をつくたれさがる
且形ばかりのひろき長老
和及
行うくて住おきくぬ彼ち
とゝ〳〵とあるゝ陰風の高
子サン
杉風
おもしろ　豊こおおりおりて仮松
松リン
りわ
陰にをれども繁い角かれ
陳おの大この末に近所
岩ゝ
尼　尼ちのむこ紐尺分され
山陰
人　木陰の後乃人の静さ
夏由
タソ　ヒるゆゑあるなるにはめてこう
山リン
子供よもるも一芝居あるる
まぬ
ウト　因人を出て休る新月秋
コ舟
新　萩さ一出す長うまで
ネト
向一付寄と赤こ久を付て
似去
一茎流りて和尚の出世
風山
笠　出付ておくこそのねうえ
茶柳

田を植る附い庭人さ一合て　笑由
ト
テ　庭人も速こさそふ糸宮　ソラ
ヒ十　乃ち一こ持て中〳〵しまき　秋色
おの沢一る母のるさ　本因
敗こゝろ対人の使いるめき　ウ
、
一格　一おの癖法うつけこる　弱
松明こ白えむとふ悪い法　キ角
不柏子おお人こ佑さひこう　和
、
松　おの杖をこそこ　尼庭　和荊
菓子やりて孫こ乗る子供尼　弊菓
、
初茄　拾人の小去いお歩を立あれや　十紅
枯世こ灯持一秋月　昊天
西門い笠焼やゝまさけて　風芋
尼戸渡又法やゝゝれ出て　柳士
ヒ浪　見る弟の足えぬふろ柳　ソ松
町人の武士と出合おゝく　色正
ミシ　もいト世をいなす分お　ロカ

翁
客
友
旅
篠掘
各米
みむ
朋イ
仲る
水仙
笠
ヨ四

遠き日に出て志やうの正うも　佑ホ
客のおとれいわてくすし　嵐竹
同座の体をきすを遊　芒風
行くくふ芽くの神語　岩翁
果物のつくを老仏の孝　ま陌
柳ふ〳〵おの木より　住峰
天名の林の杖い一系ち　乙孝
各むおのをき　米
毋方に敵て月のおさひ　蓑羊
蔓の方に敵て月のおさひ　吉芝
蔓の中もる老行の中　卓伶
朋米の髮を結あふつ西の　猿蓑
仲方て結む坊の狩場さ　杏る
水仙　青弦
六月も老ろく山の秀しめ
大串きぬ袂い姉と麦お　ヤハ
何方いちをみて出ぐひ　遊支
笠　おおのるほい内文の乳汲　リ孔
同位の速も中のよ門士　風山

六行
元
侍
帝
トギ
さミ
角
笠
ヨ十
侍
三臣
キく
三匹

扱つ品つ世の云文の一ワお　胡仙
言葉い止に孤の云を　以仝
行戸立と加坊の元を少合　風仏
杖き〳〵る刃とおよこ侍　号彩
文る社強突彼る蔵の角　ソラ
為のお伽の位ふる月　翁
翁反とふ新しん正節扶　新桂
位語ふもあん仮の上亜　可少
結道もを付ふに出生　一字
セもしん杖ふ孫の初産　壺平
あくまう先へ形仏の藤て来る　遊支
ふの丑形いかめぬ髭早　苔二
夕乳や何葉の使も社侍赤　底青
焦〳〵ふる角きふ扶き火　新仁
生立もふ元掘に座　て　孔
殘湖あくりひろと座〳〵　苔ま
猫の子を英に文の出ちし　キラム

身

●刃独

小ぬうのうる燈の井　杜茅
教ゑすとて振る法める　舟竹
人の悪ひくうるる一枝　嵐雪
目疵をさされ君の髪搔　秀和
夕〻　春笠のるも氏乃間　芳及
シ、　けまつ〻薬子下さるぢど　秋水
ふ〻ーんぷる赤き気るあ　所考
るぬ　本家のよ苗ま〻ふ乃姓　芳
印　彩の月国なる赤子を西す拵　享子
カタキ　対ぬ敬の車図いうき杖　コセム
貸左変くも合点する君　宗隆
豈　さおくても痛ま衣　ふ丸
丁雅　性さくふれいちの小丁雅　莫之
去茅京火花の傍考対す　、
天下を平穀供す　尺
吹矢向たえて　ぬのかうせい　長水
、　庶も詰むぬ伯母の云付　水胡
奴

独

文月
巳
かまれするおけい痛も独考　秋二
物と已とうるすの阪次　仁小
同一の老の咲乃あくくて　秋リン
欠　欠されて又苔苔やる行　ヤハ
欠　ふ振る部みてえを巻て足る　リ牛
多考　多お去の秋も足えぬ猫の妖　ハ
、　めつる月のまやる多る　リ合
青〻の月とうまちて旅大立　依〻
カケ　新力も笠きて考れぬひち曲　乗来
天巳　秋矢のうの去る乱る　姓人
足人の供も何やう明云　山朴
独一人　教免ゑもれて独考月　茅
秋茶　きぬくい秋ふくも同一古の考　呂丸
宿の女乃ぬきおうけ　ソラ
イ人　或人白を考すを云　フ舩
雅　国の秋い砂次の接き侵れ　仙化
子い杖ゑるく考の小仮　キ角

蝶

仲人ニ少ニちりめんもめん
十枚ニい恵と云所のち・糸
四町ゑ・りの名さく仕遣反
郵・外ニ吹くの冨を呼けて
十・人ニ子ニ金ニ次めー
金屏ニお・防の冬伝を移ー

文月

仮防

冬の美代をぞ・ニ移也く
防色を・ニ隠す畑の志ゑ
ゑ・ふ・ニも加ぬ・振・防ゑ・む

拾

、

、

笠

、

枯

仮好

仮

友五
名案
ソフ
白紅
東羽
世般
弘言
之反
去未
文章
イ拾

抵抵ニ小茶・濃
桜の子ニ・姫の袖をあ・ゑり
左如ゑ・ニ医・防の冬・んをれおて
行町出ゑす畑　秋田
ゑ・ざ・の仕合ワゑき・ゑの呂
係・母の友をわゑる去の百
冬・ホカニメゑる・ゑワら

おヤい抵そ〻・宗ニ京出て　来

初茄

、

白瓜

、

芽

仮

、

笠

、

仮

街

、

草・物の枝ゑぎあふ・姫・蝶　芽
ち・防ゑそちとゑてゑ・ろ・姓　李夕
上方て目ゑ・把てゑやゑ・ふ・ゑ・姫　呂天
けるゑ・ゑけゑ・ゑ上の・姫ゑ・ゑ・む　墓文
乃呂ゑもあゑて・歌合・振也　天窓
乃・姫・乃ゑ・第ゑ・ゑ・冬ゑ・ゑり　文
後・冬の女・冬の角ニ母乃角　百花
懸ゑ百ゑ・向ゑて来ゑ　以之
仮・冬ゑも・ゑ・数の・ゑ・谷・冬ゑん　麦士
振ゑり供を・純ゑの・親ん　笑由
ゑ・ゑあゑて・冬ゑりニあく　芽二
糸・冬ニ花の・親ゑ・乳のゑり　广山
生て世ゑ・ニ・冬ゑる・老角が　キ角
ゑと・ゑ・ゑ糸乃・情ゑ・ゑ・む　荒雪
花ゑ・ゑ・ゑ・ゑ・姫・出ゑ・ゑ・花・盛　角
ゑ・ゑ・ゑ・ゑ・ゑ・姫の仕合　リ牛

炭　何お　すんありと理に落る歟も　杣りと

桂おもり戻る夕月　ヤハ

何恙　恙みしてお志やる丹えいる余　荷丁

笠　性にとれて作とまろし　章卒

出代ゝ小のゝ小町ゝあんまるちや　慧二

九代目の名をるに立て秋の風　麦士

天河　とを度乃婿も菖蒲の神　以之

考去　医者及の噂もあさすの元なり　巴郭

るすまさえあれは婿の　涛くる　卒

肩れぬ日も帰に入に春　逵支

笠　大ユ　屋根を先え雲乃大工屋すえ　二

二三反新の代るゝ　作　敢　丸人

持十　味る日まもかれ精進　二

本年　平生も木挨の孫のくもにそ　羽雀

やまし　屋根莢の乃ふい実る花を居る　来音

汜幡　惚つきそうり皆掛なり　栞舟

禿と一歩にきると畏り　紀白

日用　ある寄は日雇掛る貝吹て　コ应

月の隠るゝ戸扉の門　き角

炭　祖父ら手の火桶も居寸斗之　、

角力ひんきの神も立方　松波

枕　手傳　隠めて茶箱をきる　独　泊　函行

鑿浅さるく羽ナ年手傳　芳水

壬　何搆　大内に井戸掃をめす秋の風　一相

地震に轉ふ松乃下落　乍木

ある乃に母の里より文をおし　函峯

白扇　川ゝ偏て武士乃入交　吏令

ゴオ　何につけても俤乃盤和　之士

るふりをさて辜と果おきき　萩人

三日　山寺の綰のとらて子供を達　芝舩

納和の病を見てをうゝる　除凡

ね木搆　詰てねるおを笑止かね茶掛　林角

ヒナ　万サイ　万歳乃姿をそりいゝあしく　木因

村まつきと太に上るし　斜花

吐きくり乃・拂の乃乃面白や　武藤
金持く摂の美えい花咲て　風曲
言もをにて仕ふ献立　芝栗
叫れて大悪・翁乃拍子付　いち
生るくや声も恒よ男の子　キ角
えちしくるる新少の　風玉
花・季ゆの手弦おて拍子付　横九
六月　枯
六月・新の宿をうきぬ不し　り雪
桂十　聖美よ干鰯うする演の月　芝二
唐・人うこの踊をうーき　伯楓
以れ　唐仲よ新も初てみる吹れ　佐為
ムツ　うち安の役よ常る月の秋　魚谷
悪夫・芝よ悪一と古皮篭　芳伊
拍子よ夜ぬ砂星ともも　因入
月・今狂て谷乃　松　拳　り角
夕負　いぬる伯父乃よ尾の枝秀　宰陀
乃ん　菊恒の秋よ菊系乃ん　生弼

り拂　新くんよ仕て拍を菜次身　立相
尾恵の拍うる俳連うる　涼ト
仁美　菜弦・系の今うタもれ　り和
松　花々ーの咲ーれる畑乃　千稼
夫も足知てあるる番・振　鯉汁
後生・歌とつ入れ居うる　お楚
桂十　瓜畠の書社代よ新乃月　伯楓
後生歌　踊うんとそのする賀・早　有梁
五月　社既て寿もある孫・反　七面
、　文出て弦の仕事る新うう　芝二
手呂ちちう祖母の友達　楚
言手・賀年一日二日お兄　水巻
髪の結目乃名き姿尺　仙化
ムツ　なるを孤をとる武士めう　从我
ゴレ　ことる付・尻の邦以　五角
付　後うをれてきむ第　石人
ナム　あのだいとる角も保度の天　許舟

コヒエ
稗・えゝ尻たゝく間 後 岩弱
枯 おもしろきつき 懸 焙のきゝて 敵士
おかのおうゝ 巻ふ十余 集加
なゝ
変ゝ 代まもお例な・ゝ り和
寄 まにさくゝろまて 竹ゝ 冠那
舞い ゝゝ ゝゝ ゝゝ ゝゝ 左角
お客の傳ま一帝ま 灯の 明 り寄
柳十 柳ゝゝ 後のゝゝ ゝゝ ゝゝ 和歌
先代 先代も 別後の 花乃 吹 拾 呂杯
ヤヽ入 義・入ま 出る 義 ま お 長 及我
ムツ 見をゝう 鉄 炮 雑い 多 殺て 柳リン
子・彼の 明の 中西 平 博 東 御
使 使ゝゝゝ 使の 未見て す 逢支
天河 長白をゝゝ 麦のゝゝ 町 三位
伯母あゝゝ 始あれ 乳の 長れ 有 栗
元祐 柳・柳ま あま 赤見ゝ ゝゝ 山 御
枇杷 京良をて 信花く 後の 十三 歩 考白

彩乃麻のひんと尻たゝ イ 吹
日盛て孫ま 吸 間 提さゝて 御子
和田・秩文ゝも 独 彩・紫 添紫
をゝゝの 末てい 紀をあゝゝ 彩
水 及ゝ 末て 考ゝ 吸 附 長天
三月 あま 長見ゝさ る 孫 吹 友松
園ゝゝゝ 凡ね てみゝ 李夕
化 粉ゝゝ ふい見ゝ 姫の 花 六芝
彼 の 写見乃夕 某所を 胡 西
法会 云 伝ゝ 田 ゝ 長く 斤 使 豆 作才
田 ふい せ・ 彦ゝ 乳 ゝ ゝ 長 木十
孤花 あ あの 廊 の すゝ き や ゝ 多 乃
六尺 見の 椅 も ぬ 医 者の 六・尺 宋 彩
乃 灯ゝ 極ゝ 姫を 見 送ゝ セ 東 御
ゝゝて あゝる 尼 宝の 中 栗 九
山夕 カヽキ 望・ 鼎 も かゝ ぬ 合点の お 付 右 紀
上午 いゝ 作ゝ も 付い ま ゝ 支 考

他

廿。彦之臣実直ぬ見悟して　丹型
屋もん武士の二ん生とも　山形

下ま
クワ
ふも昔下ま と守める　型航
原の山乃出る日もぢのきりむと　東ね
うぢらつひきの我刃あるとも　六之

上戸
付合も居上戸まで呑ぬ　嵐業
さくり〜とあふれ流る　伐水
賀て和弟もれあるる　酒屋
下戸を悩める雪玉秋の雲　力弓
稽

上戸
まぶの梅を我刃はたとり　義
娘もぬ娘の眉うでゐる　ワ保

又さとあ〜ふ娘よりしふ　ヤハ
炭
とくとと大酒もぢのう　コ型
ムま
ぢまのぬむ状のあと失　リ牛
持うまへて毒の髪ぐう　松涛
読本
囚秋あ〜日い盃の黄昏　才丸
コシキ
ぐ食とも世いわ〜ぬ月の張　琴白

エタ
其他
仏教ある酒食の様多　立此
仏壇の禾読来る恒の寺　宮
をき中。居も存乃　此
る士をまろ意つき井戸の猪　生
丸
月数の髪を陸ちみ出　許去
大灯て居あてふ子。仏壇　義
沖田祭ま生す　足。牛　キ角
月ま寺る利反鞘跡の改付　フ船
和芋もへとる裡門の書　仏化
ぐ
軒
ぢろ正毒反ぢるふれてく　型風
木戸ま中和の立ぬ　卍角
拓
、
鞍のんとく焼田　跡角
尾湾ふ子虎の中　斗加
尾泡
歯をみく物殺の先乃時　仏苦
叶くの花人ふのるま人　寿門
、
仏弓
孫あま舟てきあふ反ち　村コ
ぢまやぬ和の孩　乃条
壬

子。伝はる伝ふる意を筆て　羽

△人位字美伴ニ用ル歌不審

姫松の位よ〳〵侍ん　仏

舟〳〵そよ〳〵岩乃萩の花　ホ乃

姥　時乃人を位セて我も　凉ト

り挿

△人位歌ニ仏忘仏天人歌不審

古今　昔より但式も部歌を定ル〳〵仏忘の歌

ニ仮令人位ヲ位ル人位の振い歌ふべきニ

▲人位歌ニ人位時ニ位ふ歌況や世界美ある

忘天女仏人の歌を筆ふ歌ふ一りも仏者子乃

ときい乃の人ゐれも古人と歌ニ入る有り

人位と寄ル今おるいるゐるう者ゐて安も

文者の対句ニる歌さるる中ニ

ろもも花の姿も老ぬの外　羽

さろ氏　ま〳〵〳〵とアを行く風乃　立ホ

仏　布袋ニは名井の化身も　羽

寄う居〳〵ひとゐ〳〵　あ位

冬ニ

、

木孫ニる果ぬ用ヒぬ時乃　如風

汐む仏乃夏日をつ〳〵　知ら

李もつぼ乃時雖も〳〵　歌人

孫〳〵やまもること立止　カラ

文孫のちゐも歌おうぐち　人

ひさ

、

姫も程の口てせん　さく　茸二

ゐもも風つもぬ孫さ〳〵ゐ　リ和

忘いるすう〳〵柳さ〳〵する　在支

笠　祖母ノ忘　床ト

今のうき世イ忘ゐ〳〵ぬ

宙　要ヘイ　昨ウ

医〳〵れて医決ち　時ウ

あの男〳〵し〳〵乃ん母。新　梁之

仙　神もち仏ザ〳〵深ゐ　羽

多　茜を去ちる乃乃云彼　、

仲。孫〳〵字位の綱代と打眺　小枝

△姿情用の之仏も不審

姿ハ　支伴門の字歌〳〵五歌中の名歌及病名

ホも仏歌ニ入ル下ニ使句あ〳〵

情ハ人ニ与フルの句をいふ 与情の句ハ已下 英国康哉ふ種不ある
用ハ能義をいふ 男行男女伝伝の行をいふ
汎に用ひ用ひて 与伝つの字なし
右之教い多用れい乃句 乃句おろ〳〵流れも
吉凶の法句〳〵 今初心の方に伝ニ教ふ
人人伝人名 ウ人伝 ス多 ナ情 用 能義
一行ニ二三 ハ上より次第ス
ス人 風乃勇ム 外ニ 高ニ 仏ふ
ウ 能やとも〳〵 笠のさん
ウ用 乃為乃 ニ伝 高ニて
所の家を ふる 赤ふる 生
新人の 秀乃 白おき 種
用 日のち〳〵ニ地ニ 来をる
ウ 戦尾ハ 宿ニ 名あ
ス用ス 髪ナ乃を 思ふ 分の
サス甲 仏のつし と 気を 波 拾

用 悔 ふ そ と ま る す こ く と 白く
ウ用 新法の 陸ニ〳〵 大を 焚て
ウ あ〳〵い 矣ニ 乃 ニ 〳〵 家
ウ名 田中 る 小乃 う 柳 る 比
用ウス ち乃ニ 舟 ハ く 人 ち ん む
用 英 を 模ニ 脚 る 月 和
用 麻 さ〳〵き 町ニ おり る
ウ用 二の尼ニ を 赤の 花乃 生 き く
ス用 様 て 存ニ て ち う 使 る 尼
右一行の中人 る き 白い 只 二句ニ 九 力 仏ニ 人 位
十ち う 多きい る 〳〵 さて 背 物 手乃 下の 五 件 人 中
二主の 形 制 を ち む 風 尼 屋 芝 を 離 り る 英 体ニ
初人ニ 三 変 を 有 る 方 仏ニ 伝ニ 伝 〳〵 地 の 五 る り
英 変 敗ニ 定 式 と 有 〳〵 彼 一 流ニ 乃 る き く 古 用 も
乃 西 宮 西 は 情 も 皆 人 位 と 思 り そ い 偏 字 乃
美 の 不 明 る 為 ニ 又 法 門 も 悔 と 人 位 を 打
限 ち り 皇 皆 為 を 改 と 古 る 変 ニ

新

△人は一人哉不堪　慧子
郭乃　郭おくるも一人なる　キ角
傳てる月の大般若かな　播川
月のそを人もれなる冥い家　台太
庭人のかゝも出代るんやら　水胡
文月　尻も結ぶあをむの云付　拙二
かまきりはおりて蝉も一人居

△一人は二人　二去
花は二人月人あるぬ目え　アタ
七夕　二人郭乃　伊ゝ　ウ中
△人青河ゝ二去
砧　村切ゝ役の人は結ぶて　呂風
義をあれす人をか　雑　林和
裏　郭を寄をも人を呼ゝ　南木
降人とある蛇の九寸五ア　、
△人日河　三去　カ二五　八
るの月ゝ月ゝ人　ゝ　地内

拾

、
根　牛も人ゝゝ　弱
水　蒔ゝ乃ゝ人を見知る　文芽
花さくを探す人もあるゝ　去来
人の時ゝ空乃分のゝ　文和
人月　花は正月のあ　先之
換都て乃田も寄る人の声　地水
米五本人ゝ乃ゝ花見せむ　嵐ラン
三日　今ゝゝも人も　去　除風
たゝく人を　弱ゝの声　支考
秋百　秋をうゝて人も　水南
きゝ人あゝしびをゝ　仄止
乃れて朱をあゝ老人　左把
年新　ゝもつゝ今は客人　白朱
白タ　此時て月秋をかむる人連　加枝
一月出て森れやゝ孫人　乃子
岩多　佐交の傳ゝ哉あ乃人　多岐
小独ゝ人ゝゝゝ忍入　、

人の振まる〳〵ぜる一枝寒　嵐雪
秋ふかみと人ゑれても　秀和
りゐそ〳〵人天窮のそれ　雪
ものまりしもの人〳〵りして　和
あもしのうゝを人のよの中　舟竹

△父母云々　二去

さ〳〵合おるゐ云て伯母招　友指
杞乞よくむ氣母う袴狂　一瓦
白ゐまう母叔の氣乃書却　一扇

杞

△子　二去　　京百去

杖も子佐よ仕〳〵る　杖　不撤
非子の立未ゐ乃を斤なて　不玉
ぶり〳〵ゐきのゐ子新〳〵り　玉文

奚

と〳〵あて条を角ゐ佐ゐ子　山り

し

ゐ佐てもて寿雅の甘ゐ寿　寿欣

岫

立日ゐる子佐ゐ乃吳寿おう　卫臼
甘子寿の中〳〵　徐門　方徐

あゐまいあゐ子甘ゐ尻　徐枕
宙吹て拾〳〵あ〳〵ま羽ゐ　麦士

△非人佐名ト人名載不題

風の分ゐ甘ゐ高ゐ仕〳〵ゐ　菊
佐や〳〵ゐ〳〵ゐ笠のさんも　ヤ水

冬〳〵

友名

あ仕の乃ゐ仕ゐ乃ゐ志て　力弓
山吹や寿ゐ云徐佐乃拾衣　友白

麦栗

脇を菊乃　机拾ま厳　キ角

京人

子徐ゐ廊夕ゐや杖と甘ゐ　、

仏

云孫ちあ森釈世寿ゐ高白乃　乃子

浪

花の吹ゐを乃〳〵ゐ宝乃　八宗
西門の寿ゐ机ゐ白ゐて月　牧寿

△吳人名　二去　　カ五

京今五　古代のあ孫を云ゐて南白の人の侍ゐ字さも
ゐる白毎ゐあゐ人ゐれゐ世京人の名をゐ〳〵ゐ
侍の一二白ゐゐ乃ゐ〳〵ゐ

▲式二二白京力仙の子ゐ古人の名い人〳〵ゐ〳〵ゐ五ゐ

付る所よりかく成さまと風雅ある作あり三尼い
若くるまゝきるゆ清るうそ者ゝ
字豊のんゝくもあん去 仏去
一元度 世のきゝえ宣京西り時多 義
美人も考ゝす 教改の事 コ度
炭 岐之ちをゝみゝえて二号院 、
麦ゝの笛や布作の夕除 彦川
奈花 彩一人を あゝ武者の中 仙角
三匹 相得乃あゝて 弁 夏 竹葉
一休の伏ゝ新の意ゝあゝる キラム
小弓 家上を去ゝ伏尾の夏 山夕
恋義の初ゝ折ゝ月の恋 岩翁
数部ゝ岐ゝ字四る北声 キ角
焦 聖茸ゝ下部のおゝ高れて 栗和
孔明の刀をく 麻の角 支亨
部中ゝすゝ面因ゝ係 角
△同作古人名 面去

冬 月拍 去ゝ宗祇の名を付ゝ多 ト玉
日東乃雪白ゝ坊ゝ月を見て 之五
去 秋社 和名ゝ ゝる 次 巳葉
伯部ゝ新ゝて来いゝく ヤ水
戦 仏 以前を翁と者良と二人連 ナ千
連仏もせお新の孫子次 如時
イセ 月花を雲ゝ係ゝる数ゝ数女 茂秋
栗の目乃柳美妃の名ゝ悟乳て 但加
随 、 絵も 柳美妃の 伯ゝる ち 夜谷
ゑゝゝをいゝふゝゝゝいよゝ者 千梅
奥 伯 ゑと家茸いおゝゝゝ 支角
花の中 義美の ち乃七ふゝき 不玉
負 仏 花の張意十のゝ何もゝ 田入
茸のゝゝ出山乃釈世ト伯 、
△皮名武名仙俗名 名ゝ去 名ゝ去
形名ゝ乃 ゝ(ま)の 時 之川
八夕 去 伯去をもゝ何ゝる我をゝて 寸昭

一位ちそ 仙 日影を望て仙境に入 仙去
慨嘆 悲傷や世を つくらむ 、
去助 ちのも 今の世 尾 国友
主居 門行 ゆ ぢ ち 水南
俗 雪は別 ち 望乃 百助 乙孝
保嬉 孫 ち 次 草 ふ い 雪も ふ 健峯
、 ふ 立の く 信の 俳 を 未 仙去
又 宴 ま れ る 字 い 去 行 ― 、
一尺位七 六 義 ち 生 約 の 山乃 雪 ま ま 、
何 乙 す る 俗 の ち て ― 大 約 云 、
乃 匂 ま 俗 乙 に に 式 す ま 奇 ―

△老若 面去 古 行 去

老松 と き に の ― ― え 松 の ま 狂 始
ヤヘ 朝 を 思 む ま 老 の 時 直 ゆ 和 乃
花枝 考 川 老らく の 付 計 直 を 行 ― む キ 角
老 切 を 炊 く 行 ま 軍 ― て 、
杞 連 寿 の 口 も ち ん 老 俗 席 枝

、 ち ま す 老 木 の 花 も ひ ん ― 辛 敬
盗 ま の ち ― 歌 て 咲 乃 ― 小 枝
花 ま 乃 代 も 若 木 の 花 乃 次 初 て 枝 士
ま ん 時 ま ― ― る ― 云 分 お 巴 弓
赤 仮 を 足 ま ら む の 彩 を 芽 矢 仮
梅 小 仮 を 加 ― ― も 若 ん ― 五 宮
茂 枝 や ち 乃 数 も 若 竹 薬 ま ふ 之 伍
若 ん 如 並 て ひ ん 子 ま ― 老 付
△遊 京 面去
梅 む ― 遊 の 又 ― 合 て 素 の 白 凡 紫
菊 ひ 才 子 遊 の あ ― 連 て 立 ま 子
杞 上 立 猶 京 の 丈 い き れ ― 芽 仲 小 枝
伍 安 位 い ち の 拾 仮 乃 丘 那 京 枝 寿
そ ― ― 十 秋 忌 陽 ― 系 京 友 梅
大 立 京 ま 傍 芽 の 名 を 立 ― り 石
よ ん 京 の 尺 ― れ ― 枝 の 京 弘 言
武 ま 京 の 遊 ― ― ま れ ― 正 秀

波

おろ〳〵足ゆる家の瓦中戸　去来
松のあちこちを通る云京戸　ウセ
家〳〵ある杖をふとんふんどし　素民

△誰・防・猫・使　西去

岩多

防つてをれい波も太郎さびしん　太郎
雪降るおるとん波も考あんと　太之
山アるる波まつ風の吹風　伝化

菜川

波防のみそおまの花乃門　支考

拾

ひくをを子一防の坊　ソラ
家京も加ぬ猫防あるも　、

岩多

㊀
我性〳〵表生子塗防の出好　白牡
左方のぬるいお防の犯を抱　之

遠

姫ひとりをむろう育る行楽
我独去てをれい皆ひとれ　杜芽

知

すくらあるさ使るちんを屋　文采
あけい使の戻うるこら　何笠

吉今記　使ゆ句まドあれと岱氏西去の自徒あり

岩多

△巳・我　五去

小いもの子門をい歩屋　白牡
去ゆてあるるこるや茶碗伊　、
山を見る家〳〵我を学ゑも　柳口
眠れい我方をつあるる去の月　柳河

伊

我て強るるとと我前い月　青面

八年

ふおもるるさう考〳〵ゑ　古井
芭二ゆも仏きゑ尾　誠人

去

我者の美水伊ゑ見記て　、

△男・女　五去

吉今記　男女考河ゑ出そう西白ユ巳美体教頃西

星月　女考ゆ〳〵目目と出そうおよ一つ　女考

女松女波ホの美体西去

▲岱氏あれとも支考もき角も考河会口河西去
の伊句あり美体い三句の字去勿佐之

西白の拾女の杖乃教まや　義

茗

考ゑて女ゑ蟹　猫〳〵　、

イロセ　月花を愛する婦人を妹せ　茂秋
女房侍　女房侍逢ひ捨ぬ陸川　卜部
合羽きて　合羽きてもろこしの甘原町　許云
コハ　移門　休しき女史作れ　独
ヤヘ　門侍の内よりのみ乃ゝ　段征
ゝろ〻ゝ　ゝろ〻ゝ男勇ましられて　又石
△男・女　白洲　西去
一代柄　吉祥天女も是移乃月　義
ゝさの雪　ゝさの雪天女一又ゝ粕をゝく　、
多和の花　多和の花ゝ女中乃看侍　女秋
おゝ云　おゝ云ゝそゝ和女の言実　子秀
出女　出女の丸依姫い是とゝや　似去
古拾　小町ゝまゝの女ゝゝ　、
雪光　ゝゝ男ゝ男ゝ男ゝたゝ　楚巷
段立　段立ゝ家の通の男ゝ　百花
△武・侍・粕　西去
郭　粕乃ゝゝ武士ゝ六七隣　芳至

武丸乃武仏ゝ丸ゝ画ゝ　キ角
表ゝ　表ゝ侍乃子侍ゝ　良丸
侍ゝ　侍ゝもゝひこ仕ゝい侍ゝ成　、
子侍ゝ　子侍ゝ子ゝ粕ゝ粕ゝをゝゝ　ゝ身
粕きい　粕きい田舎ゝ丸ゝ是ゝ　、
ムツ
△君・客　西去
路ゝ　路ゝをゝ君ゝ君ゝ義ゝ松　前雪
君侍ゝ　君侍ゝゝ　ゝゝゝ実ゝ　義
ゝの下乃　ゝの下乃君ゝぬゝ雪月　冬市
ムウ　侍ゝい君ゝ侍ゝ向て侍ゝ粕　雪
ゝゝの　ゝゝの丸ゝ粕ゝ　お　口　广之
笠　侍居乃客　侍ゝ客ゝ侍ゝ　風山
侍ゝ客ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ　文郎
限　ゝゝ花ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ　相之
△妻・姫・秋・粕　西去
ゝ侍ゝ侍ゝ　妻乃宜　口力
白侍　独ゝ侍ゝ侍ゝ　妻　佑力

さゝ

七夕のよりて月も笑きて　ヨラン

笠

問市の紙乃来て吹徒　茅花

紙のあるも今〻不絶之

、

手紙を出入のむ〻られを来て　り和

森つ紙りぢとむくとう花の去

、

△庭人を云情を者去

岁

紙いあれも仕庭人　白和

庭人いむ〻もめつるを作れす　来羽

、

なををさせる紙の苦やま寺

なをるゝ　仙せぬ　衿　付　和

白

なをゝ出代ぞの庶立て　り中

妨　妹　ゆ〻　孝　を　ム

、

ゆゝ日ゝ情を あゝきを振日　原ト

白ヤ仙され情振され　せきゝひ

、

手流の者乃素を吸ゝ之　唐仙

癸　居あ　者乃比丘　逢　逢支

天河

△同季百句二のね

句

ア　紙のふゝれゝ　卿中　也　る　中

ナ　百ゝの卿の代を　根荻て　、

笠

ハ　大ユ京も ふあちく　出代て　和

ア　出代のゝう似ぬちの庁徒受　茅柳

右方仏の倭ゝ書をゝて　氏方仏を　行一日書い

百句あゝて　許ます　きう

△吳支仲哉不廻

吳三　ゆを毛とゝふ紙い二句去を　云を　許ま一一

▲同の哉を　波も廻ゝい　ゆを毛の紙哉を廻ゝま

及ま支者　波者の倭をゝを

茅

ゝ百を者ゝ　毋乃候臣　ユ山

一性さき一　苟茅の宗　来度

目用

吳の ユ支二日用ゝ　目を仍て　義

茅作ゝ倭を　あゝく　目を宗　松り

松ゝの候乃ゝ百ゝ　波ゝて　義

奈

目育

紙箇を　ゝを　ゝゝ　紙の倭　、

ひさ　目尻
目のうちあかいところ　みを径
尻のをうなき　笑　り東
ぢを取けの目をぬてゐる　仏士
笑　赤の後ろのやんちと　牛牙　し
用ゐる　目口　り由
脇れい　ぬ口　反村
赤裏　分尻　ちきうんや　太髭
ち手ちめやぢの点もえぬ　花フ
ん指ち我まて元を至てえる　り牛
炭　手肩　正去ちあ　あちぬ　者　枕リン
帽子も肩ゑちぬ黒こて　ヤハ
さん弟尻の金ち小たひ　徐才
白　引版の之用ゐる男初　太
肩て閉きち後の出代　由
焦　田舎万ゑ足を伸ち指ハ不二　ち此
後ちとれも南天　秋航

指抜　手の花二まの抜をたくらむ　キ角
セ沈　肩中いちく　沈うちりく　木白
他　ちるちる抜の市点仮おき　梅影
手をひうちる猿沈の点　妃刀
手よあち皆ちる　頭て　白
但袋　但もちち　や待ち　代点　ま孫

△髪は髪　二去
行は押　ちむおとひの髪　海新
笠とれいお髪ちるむ革鞋を　羽
帽のうちは後さ　あふ　ワ保
皆も髪もちれす抜　另　り和
髪をきれてあちちある　宋拉
ちすの万い跳ておく　作髪　夜谷

△髪　面去
月はたちる夜時の髪の糸拉て　力号
冬　ちちいさむ戦のうと　刈　、
書ちあちぬるの髪ちる　林時
ヤハ

尺乃贅白き羽のお法　示右
ゆふとすれも呂ぬくる贅　立行
奥　墨うゝ市く東風ま吹する　呂丸

吉色　月皐年口午足　巳六品八支伴ノ弁ナレト
平活ノ用多ケレハ折ヲカヘテ巳ハカリモ有ヘレ
▲ゆくふい大丸の活之支伴ま教を改て一伺あ
す砥ま月ロウデと月なてとる月ま与と年立ぬ

△午・口・月　三去

サル　和の刻乃笑ま遠ふ西方　弦於
懐ま多をあくむる秋の月　丸兆
教　セてるまの乳防年ふ拡生　キ角
情引ま多陳さえきる巴寄　百り
栗ひえるまを付てうみつく　地伯
月　三年く私のまるたきく寸　支友
東花　ぬきれまを丸刈てるおくてふ　一比
梅てま付ふ川舟の　舳　寸庫
低　荒伺ま大るのまを不与て　林和

巳　まの陳をうり秋る松的　口ケン
小伺の色ま以ちこする　去芳
人まとりつく陳久ほんロを　戸ふ
呼てをれい内文の月とする　芳竹
郷のひとを眉目ま連あく　り斧
ひ尻　△改尻・板　西去
和尻　秋の夕を改　あゝ〜セ　り東
花ま花ま局改ま　誘れ　ロ尓
支強　ま乃性の出き　風る　イ伺
ゆきひの尻いをま　下舟　益竹
教　板加の去る笑て　山ま花　角
教　旦般の板、ま色る　裏小舟　備川
教　ま債ま いのこの板を　おくきて　三逗
教　寺ゥれて扨木ま板い　立ぬや〜　昇角
教　ま和ちぬ日乃くセうむる板　乙扨
教　月のおいてむ板きい　押ますり　小去
△新・号　西去

梦十
今ま孫士孫起の歌は春日影　梅光
云伝を屈てたる白てゆ　有楽
拾
あのかをを満む乙の子　口通
注白をうす畑の志水　夕菓
岩多
紙帳〜白岩めの性好　白粗
歌又の白も乃ふを新〜　云之
琉系
白紙帳の外は見すれて　琴風
肩ぬ程見記のあきさぐの白　扇書
市西
杜草　うの　聲〜　見え　弥柳
竹ちぬ見うまむる水見袋　ウ鹿
△孔・裸・裁・脾　面去
瓦帝
粉ふを入れ〜乃を花の孔　嵐雪
枕のそ志ある間孔　英〜　笠凸
岩多
裸ま〜ま〜や角力い論〜　粗
白
ふふ〜も後〜裸　多　栗几
裁のまま弗泊の除敷の号きま　木芩
おま裁ふる力ん乃ふ　芋　、

金彩
搜て風きる　徒　狭笠　仲二
中〜字乃搜ま〜〜る一名切　英名
△多・ん　三去　カヨロ
金彩と人ま〜そ〜〜多の安さ　三羽
ひとちる多い西金ら夜きて　、
サル
笠ぬひの芽ま〜き多いやれ〜　大徐
油ま乃人ま人又ぬ多の比乃　私書
琉花
おそ〜ま反采の多乃ぬ　コ十
、
多ひあぐ〜る〜ち乃原人　文石
西の表原をて〜ふ〜ん〜　号形
タテ
月のひつ〜をんま〜ま〜る　ソラン
又ぬ乃吳乃ん乃ふ〜　一ム
白仙
風のんれ志る　乃多　一原
、
ま〜ま〜ぬんま〜れ　小　油　風的
四隅のあ〜んや〜ワちれぬ　梅先
孫ある人のんま〜ん付ま〜て　松り乙松
ふの月は多のん　宮〜〜寸

△乳 三去 カヨに 尾張商 注云
乳を付て入るゝ小の十五枚 、
拾るも乳人大ユよ乳を垂す 姑俗
垂昊も月よの母を乳の時て 一字
生い乳味ようり 粗ふく風 蓼生
まるゝ乳をうゝてとやゝく ウ中
乳合ら乳乃 移乳形ふ 独写
乳ゝ乳ゝき西八象の作功去 列字
わゐの面えい内文の乳仮 虎え
乳病い候乳の乳のつまり 十山
乳の乳候ん ちちぐ 抵 、 え
△侯ゝ侯抵 五去
侯抵い英ゝの 本 移 協 太岱
ゝふ言を郭て やまぬ水侯 青嶋
一歩 二ツを侯 抵ゝおく 支考

一搗 負 ツ 瀦 あ 已 ゐ

封法て侯ゝむ ぬい 彼男 胡中
△侯・羨 五去 古今用
板舁おくる豆間あき 五去
ゝゐ乃ゝぬ侯 かゝう 、
ゝ葉乃ゝ侯ゝ侯ゝり 宰陀
ゝゝ姫の侯ゝゝ侯ゝ 、
板乃ゝおゝれゝる 羨 抓り
呆ゝゝゝゝゝぬゝ日の羨 冬市
何を見て除のゐて羨ゝる 方九
豆羨の侯ゝく 抵ゝ夕ゝく キ角
△粗病 二去 一方粗キ用 カヨに
宣悔乃ゝ什 ゝ乃ゝ 悲しき 、
やけとゐて ゝ ゝ ゝきぶ 、
板の侯ゝる 乃ゝゝ ま移
抵も病人あ ゝ ゝ 、
月のゐゝ ゝ板き押ゝ 小去
許さぬゐゝ 時ゝ疱 疹 板壹

白

根を煎じて角力取るべし　本草

糞尖てもひとる人に糞しるる仏

△産病　面去

産婦尼の抱病を押へる　ヤハ

ヒのるまくる　抱　抱ふ　、

炭

△尿屎雪産抱そう面去　百よ二三

吉来抄　九非日尿黍のゆもヤへきう弱日嬰ふ〳〵寸

されと白白とふとも二ふ三へうた

ハスハ風　今も世上のお抱をたるよなるい市抱よ尿

を煎し人も抱おせ寸〳〵所傍よ小仗するに為式

のゆうて黍仗の雪産のとふい抱寸へう寸

小巳の尿屎い云おのゆ丈余人のおよ作をひ

て尿する人も抱尻する人もあるまし

小仗の月利よ空の抜立て　架之

三矢　雪産うとて暴お　子乃　茸二

黍ろく　未て　子純産る　りお

笠　今も小仗されいさ〳〵　脳　脳山

ちえの出産　服部の秘　壱平

ふて産さ小仗梯のお如　二

ちえ舟とふを嫌ふ　、

ふくんて雪産　雪産てあろ　兎士

雪産うつひ産〳〵産の所　従者

又操　厩ちえの白も風あく屯花　、

皇ノ

今の産ゆい　ヤうの雪産　呂杯

ヤラ　附ゆの抜イ　ちゃる小仗　和

産乳う悟をつふ雪産　設水

ちえ舟の白い大和河内を　牛和

産　産を　行セて　ちん小仗　ふ丞

産世尿屎の秘を曲言と人作一白の作をもあく

おの白よ高も産きよ好て用る人あり玄作作

秘味ふく付よ産ミあくに決て用すきるゆ

△矢述懐哉不煙　古八矢モ之去

述懐ハ情のゆあれい古情皆考れも文京の

抱ろよ人寸ゆるゆのくをうてそい作世の考て

和い陽さるとそ紙多れ
ひろうさるとそ

印　作さるんもせき校や約て　羽
ワヒ　宇清　撃きゝ処をずい押る　歌七
入山の茨と彦ゝうき侯　ソラ
初茄　教色ともれて独ひる月　羽
ヨウ　京帳　きぬくい教色ともひちの子　呂九
房の女乃ぬきおうけ　ラ
壬　うくゝゝ実を務す陸奥　式之
ヒン　コキ　を迷を小独の振るぬひ舎　村コ
ふ彦ほて羊ふを食　羽
冬　あるゝゝ実と侯ゝ彦京　卜京
ヒン　カタウ　田中ある小万の振彦る比　力兮
きゝりと舟ひくく人いちんもう　ヤ水
あち　秋作と八ら式世を肯へき　城人
不来世　不悲　れるゝゝくら文字を心戸　今卜
花の笑と侯ゝ彦ゝる侯おり　、

友衣　うもゑの教色と恨て民侯　南木
ウラミ　ウキヨ　佐ユ支する今の生知　、
戸侯の力乃ぬ世ゝ　支考
女遊　他柳　ちの寿と恨の寿を迷
ウラミ　ヒン　翔のあるきゝ乃るぬ庭下　千中
実色ゝ也ゝ峠ゝおゝゝ　口俗
△日代述懷　三去
実　侯と教を拓す　目　葉　羽
月ナ　杖てゝ　ゝ侯乃佑上多之　宮雪
さミ　侯ても次ゝ得ゝ　教　ギレ
、　多の目乃実て尺ぬを河んゝ　一宇
雑　督すのある布と口ん孤地の実　東牧
カタウ　函函のるすと　くとん教卒　由之
房　全ゝもあゝく　縛のやゝ宇　宮仲
ヒン　貴とおく十二京の寿泳て　花フ
友衣　肩衣と花も吸ゝ世を持て　考
世俗　世ゝと世乃姉ゝさ出ゝさる　羽竹

□吳山家越不畑　古八三去

山家ハ山岑ノ歴嶮峠峡峠谷峠
梯ト示シ山家各ヤウニ越を許さず吳水辺吳
陸家の越の注きこと同

冬

舟岡ふくゝ　舟岡ふくゝ　山の　恒　大　安倍
笠山のあくゝ　れ　梅を　植ケて　自吳

太もたも　嵯峨　し　玄庫

舟竹　つき出る雲　ようの　下の　時　舟竹
尾上　ようゝ　ゝる　清のつき　初　茅

意柳の白根　吹　出す　山おろし　芝汲

草　淀の　秋と　世ゝ　ゝの　ゝ　東鶯

高速も　舟も　高ゝ　後　市　陸稻

比叡の空　は　花　の　越　ゝ　七百

伊やゝ　去れぬ　名の　一声　昌杯

山門　大木の　花　吹　乱　胡蝶

横根　風　谷　深き　月　倍倍

山三路

山ゝく　伊舟　陸ゝの　梅　茅　倍倍

△山　三去　カ三ロ五

古ロ　古ゝは　山ゝ　三白　去て　峯の　一茅は　二ゝと　ゝと
山を　三白　去ゝ　峯も　梯も　低も　谷も　三白　高し
梯ゝ　陸も　仲も　川も　沢も　却て　三白　去ゝ　むを　山と
峯ゝの　去姫　北余の　遠　て　乃世の　悲ゝ　比叡　姫
▲只ゝ　今を　雅ゝ　ゝ　ゝの　河て　自の　後も　ゝ　比叡ゝ
後ゝ　人峯ゝ　如名て　多用　ゝれ　ゝ　三白　去首
足の　新ゝ　小分の　名て　及用　ゝく　見ゝ　ゝれ
白去も　吳ゝ　ゝて　ゝく　山峯の　注も　伊ゝ

相　いちこゝも　山ゝ　村乃　百ゝれて　如行
撥　菴は　足ゝと　指ゝ　山北州　茅
足ゝて　通て　を　峯の　山　風
及　去ゝれも　吳ゝ　も　山の　尾　去来
山ゝき　作ゝ　家の　茨ゝく　ソラ
初茄　伊やゝ　ゝ　ゝ　去の　山　、

山伝ひ　山の端ゆ　雲の来て　桐井　二川
雲を　山田乃　杖の　勢　巴号
出代は　山の女を　亞合　地業
伊の山う　渓もろき　杖のき　東也
恨しの　山伯やと　うの山　原卜
山侍の　むとてう　すほて　汉東
ほやる　山のあま　さのたひ　許舟
ほむ　時鳥も　ゆすむ　むの山　九皐
山も　を忘れ　杉並　けさる　矢佐
一に乃　杉原　山う　青の月　梧枝
山　独活い　人は　五すの　きひと　白粒
又しても　出る　郭山　白粒
あ〳〵うるて　山も　笑す　云之
怪　吹　保す　教乃　山風　号
に　被の　い　光て　滅る　於う　山
月　あ〳〵　あるう　る　、
む　の　さく　時い　を　義を　お　山　や　あ　る　杉房　行基

山ト　カ仙云

葦　狩は　ふみ　忘て　月も　三笠山　小枝
河そ　狩る　山〳〵乃　青　爭
△峯・谷・為　西去
法　下を　泳て　れさる　峯乃　巻　郎笑
雪　ま　峯は　狩て　迎の　む　東方
雪　ま　峯は　狩て　迎の　む　東方
笑う　笑て　紐い　谷う　大川
笑う　笑て　紐い　谷う　大川
谷の　松　峯い　月　秋の　晴上う　、
秋を　保め　〳〵　谷乃　雄　只天
花を　峯　谷中　ぬる　人い　人　、
出　風　為の　屋　風も　ぬる　む　玉青
為　ホの　むち　ん　は　花を　やり　羽る　仕美
△山　教　付句
山畑乃　木　多う　色つく　風の　為　翁
石地の　板を　かく　る宮　仿　弦　孤
朱う　ち　た　峯　た　峯の　さ　た　翁
あれ　ま　た　の　山も　麦乃　ち　小
□美水辺　滅不蟲

カイ印二

古式いろ辺ニ去あるあよ非水色和の注あて
翠ゲ[illegible]の葛も水辺の七人さくあ[illegible]葛ふ[illegible]あて
矣此辺を畑さるん世界の中水おきふおれいと

去

立てのゝ後乃舟の月ゝ行よ　冬文
苔のかをする　今乃偽　季
保保ニセき社保の　葉て　旦菓

少舟

川舟の保ニ芸を引立　てソう
拾乃とゝふあゝ又西る之月　白雪
すむれニ天のうゝる　枕のくれ　除妙

むな拾

川水

供年の弓しを　谷くもき辺　ヤ水
恨こや小しゝ　ホーゝ大京さゞのむ　、

あゝ

谷川

人負ニ四く　去の川きゝ　カ兮

アメコ

番拾て舟の柿を　拾ふむ　弦在

舟水

ちすを[illegible]　弦乃鬢もたをま　之乃

を[illegible]ふ傳乃時の夕きれ　昌房

つき傳す　水の扉　五六　枝　東御

袈ニくふる足紙の　格　席令

氷水

分ゝくゝる格の玉ゆ　ん　を　き角

かも

すむ月の川くゝき名も傳れす　ソ後

川傳

魚い仏をセる　時　し　郎笑

汚きけ小玉乃　新ち尺　正位

柿十

ニ五ゝもそ年の外社舟伊　柿光

舟年

青麦さう　今ゝそゝる　伯楓

花のまくゝ玉を射てたきの下　七面

△水辺　三句続

苔他の中ニ去のむ　交ゝゝ　蓬又

苔

ゝ西白く　ニ西るかゝ社る　兮

さ〻傳やゝふい火行す　芳待て　義

舟あて〻　探もきゝる　傳傳ニ　兮

カラ子六句

夕のまきを　就る　御き　水

傳ゝて　山ゝゝる　芳の月　義

と芳又月ニ　傳ふ舟乃　教　きゝ

ゝセきあゝる　松社行傳　宏義

むな拾

ゝつをきゝる小傳ニ　ものて　枕の凡　角

△川・水　三去　多伎者

夕さ〳〵る　星川の　橋　羇

今の故　今川乃水　嵐ラン

山川や　橋の　淹あを　掠すらむ　落橋

川筋の　歩ミさまれ　ぬく　林の　ヤ水　巻耳

ちんさ〳〵の　自由を　川の　流り　巻耳

白川と　きく　〳〵　白　むすび　拾

鶯も　初花の　くるる　西の川　柔そ　交芦

焦　めつらしも　花を　見て　行　矢川　紫苑

蹴　処板の　すきま　あを　屋根　り　木

苔の　えろ　〳〵　あ　れ　あの　住ちきり　芝

水　の　沼乃　橋　行　立　歩り　角

宿　名の　沈り　〳〵　川の　水　橋　そ　方九

サル　五六本生木つけ　る　形　沼　九北

〇　ろ　ち　ろ　為　み　て　あ　て　う　、

右ふ　ろ　の　形　沼　も　水　み　く　り　東　羽

岩多　水　も　き　ま　ん　ま　ま　の　山　次　、

焦　草　も　形　乃　住　る　目　茱　楓　子

岩　る　る　山　椒　る　も　去　乃　水　、

△舟　五去　カミ　春日

百　ま　ま　く　舟　の　き　ぬ　く　羇

小文　傳　子　を　め　る　為　く　乃　舟　、

る　の　学　る　る　舟　の　狭　き　ま　郎　歩

茗　ち　る　る　舟　ま　形　乃　月　楚文

宿　皆　和　舟　い　ま　ん　る　や　り　相井

舟　あ　も　形　ま　や　ま　て　為　月　択　一　角

蕨の　上　あ　る　川　舟　東　業

蹴　れ　耳　ま　形　の　出　舟　咲　く　白　毛

舟　る　あ　れ　仏　や　の　ぎ　方　昭　士

橋山　宏　の　川　乃　舟　も　通　す　笠　通

△浪　面去　十五　六百匂

以上とのわる波乃　味気　去信
荒あれ白くよさの夕波　羽
逆上逆ゝる　波茅社浪　、

古拾忍

あつ風と波すゝ　末乃白波　、
風白ふか仮立波て　て　杉風
為の乃き胡移ゝよゝるむの波　、
又きゝ海うつ波の子あ貝　、
子松の幸ユ浪や振すゝむ　、
冬も発ゝす　大浪乃あゝ　、
見ゝのきゝ　社波茅の浪　、

一ゝ三ゝく　百匂

さゝ波の林ユ子も押毛て　三伍
松の山所も　寿乃波移も　寿浪
弾浪衣乃　裾うゝ乃波　才九

冬

次匂

仮仁の孫ホ月ホい白波ま　キ角
性ゝく仁も　ゝら浪　松波
ふゝきゝ　ゝき中も波立す　松弓

星月

拾

△波・滝　面去

かゝ川の波うゝ掬の大をおゝむ　コ奇
新ゝ震焚去を焚す舟又えて　羽
波ゝハ　波る　切ゝ　折を　り下

波

一ゝ乃雪舟波ゝ川上う　立辰
ゝ表の油波ゝ　尾　形　如風
滝形の　命ゝ　ひゝくゝ形　性之
光てゝゝろゝとまき　波　川　杜占

コハ

△橋　面去

白タフ

式橋て月秋を冬ゝ　人面　小枝
枝橋ゝ夕ア白て　立面　長弦

ゝ久てすゝ　ゝ馬橋の反　左月
ゝ冬ゝ　花又使形　係子　杜形

九月行

ゝ冬ゝ　木屋の高ユ月の冬て　浪台
木月形のゝ　ゝ社文も　ゝ久　相之

常州

絶橋の腐彦ゝ　書の浪　松侍

強弱

夕ゝ震矢刻の橋乃縦さユ　才九

△海・浦・湊　西去　京百子四

七きこ　見ゆるそれもびけの海面　之仲
そめ海白子い不以花咲て　涼ト
名玄白う　海く出る川　たね
桃白　ソヾの海岬ニ舟をまき入て　千川
雑　月雲にまにの海乃あへるを　フ船
南風知る　横雲の海　、
ムツ　海よりも霞の雲る冬の坊　桃祇
神早とや　海乃表中　衣吹
元きまふ海をそひゝに住まゐし　桃リン
、　海雲に根もなれ畑扮てゐる　冬布
拾　ちるで宿し浦の塩やたる　口通
西行土の像をねする浦の月　宗波
多　湊の者う　賀よ著也く　右範
たひ人も西に捨て湊のうき　、
翁　△池井　西去　同
鳴の池花えくと　狩る玄　乙扮

一称　性をえ知す　新しき池　ホ角
柳村田中の井戸を水欣て　一晶
汲ぬ池井戸を毛お惜し　清風
□呉坊　我不随
見る山数水辺の我乃泣なきに同し
衣らん禁い飛の　さゝりて　翁
除　林坊　さえ草烟る　花乃さりる　ホコシ
古我坊月も静に照りけり　嵐ラン
氏人の庄屋多き花もちり　葉言
衛　竪る哉むれの　表とそ見　如風
冨田　田をくすあさりに山の名を向て　あ伝
出でつる四条新角の河原町　イ然
発先　町公　ころせを上る　表一筆　曲水
今の辺に残を見侍す橋の上　臥高
、　払仏の影に夕日さし込　水
家坊　草畦に菜を蒔き草し　莨は　支考
秋風つゝる竹の店ふろ　然

天保　山川　又丈川く戻す　乃ち　同也　百川
萩原の保々出あり　山も葉山子を笑ふ苗代　ソロ　叩端
蓬　山里　日ケ山雑乃経を長く束て　雨水
ほうをまつふる柄杓の月　東夜
面白き沙くう　新る葉の上
風の字さ字　いあて　山　房梧
食案　山里　よき京つく　京の又　知　箱
鳥のおる里の垣根を解きて　カ与
ヤヘ　山里　林の里乃おて　老き　九北
首とろろ　ろろ　きの鳥　四　示右
沙里　沙平　まろ　沙のお文　母去
沙京　て　堂宮系の戻る　千那
横　く　き寺　とる　風声　木尊
田植舟漬乃女　社　掉列て　沙六
△沙里　三去　八
あら沙の　牧乃四呂撰う　キ角

つれ　き　里　沙　を　み　て　笈　を　と　く　キ風
松葉　植る　沙里　風　表の　山　茶雲
す　の　も　枯て　そ　い　来　て　く　毛仇
沙辺の　空　て　き　れ　ぬ　袖の　面　抑抑
沙　て　て　き　て　梨の　体　ひ　て　素抑
四仏の　妊川　沙　へ　の　き　京　湘和
花人　て　苗　売　つ　く　吉　沙　山　勇招
△伊里・里　面去
三坂　三　り　て　坂　母　あ　く　し　固考
九竹　抑　漬　て　て　何　乃　り　壮矣
那　い　一　り　よ　の　中　乃　奥　白杜
十　り　の　山　を　白　出　度　り　る　角
耳　仏　乃　宇　振　八　り　を　る　の　上　左家
一　里　の　炭　売　い　以　き　て　一　井
里　仏　く　陶　表　て　二　て　出　杜
磨　む　人　き　里　も　安　く　あ　て　求抑
歌　の　そ　を　抑　る　古　き　と　墓風

艾灯　爲九とゝ[illegible]おアのるさゝふ　可茂
一升つゝ　ゑん　アおり　若九
立てあゝふきアの　一ツ家　多平
菜ゝ　搗の中　アヒ　麦林
芸ひくゝ　ゑゝ　ゑゲの古さゝ　コセム
杉菜一荷を　ゑゝ　ゑる　アゝ人　義

印　△糸・村　面去
吉糸う　刻くゝ　ふし　掏　猛　谷水
ふくん　ていふ糸の宋も　至下　一点
浪ゑう糸そ　残る月のを　巴ゑ
老の糸　ゝゝも　ちら五りう　柳士
拾ゑ　かゝゝぬ村の名を付て　栗ル
山二を村い屋風を引ヒ　嵐校

文育　△市・町・辻　面去
市の仮う　ゑゝの　用　仲志
市の糸ん口て店失の移て　有梁
す掛のおい店ゑろ市ゝを　在支

拾　茎二
萩ちゝゝ　市糸の　背　義
ゝゝ　陸ゑの市爲ゑゝ　キ角
市人の肩ゝ　掛おゝ　懐ゑ　、
お扇ゝ　浪ゑゝゝん矢木の町　支考
ゑこゝつる日糸の角の河糸町　イ拾
ゑ国のあゝゝ　町ゝゝ　ゑひこ　巳杯
ゑ仏のつゝん　ゑ　ゑ日糸町　梁
ゑ掛町ゝ　杉の生　恒　二
町の調市の口ゑゝゝ　ゝれぬ　支
三法の木辻もうらゝゑゝ　性　葉太
白雲ゝ占ひくゝ辻ゝゑゝ　ゝ

△庭・坊　面去
[考注] 庭おきゝて[illegible]は古式のさゝく支考のさゝ
ゝ面去の係あゝ古式ゝ庭ゝ坊ゝ七去ゝれゝ
葱ゝゝて艾さゝゝゑ

れ狀　乙秋
雪　木良
樓山　松宰
岁　橋氏
拾　小去
夕　支考

秋寒き月と花の月と花
大屋に六具を志めて並みゐる
のうまんをうやせ歩き月の屋
川柱の得を屋に負持て
子の子屋に寒くふん坊
反物くるる屋きひの乃
反物もあちらこ寺義一重　栗ル
たすきしの　笠いふん坊　六之

△田・畑　五去　古今

秋の田さらこもねるるの去川て　就人
田もをひてあまさき口　翁
すしさ田の生殖さくえて　、
田の中にわやねんの子ふし　、
初秋やあもまき田の一ささ　、
田面ちれ　後の相をの寺　新見
非義人ある人の桑畑　翁
小畑もをくいもの神風　、

棹　瓜畑の老人のそりて新の月　伯楓
雪まる移る　此のちさ　おりれ

△田に畑をそり三去

岁　移乃に畑を去ぬる大ユ小衣　白紅
ち条てそ寺て　田　巳　、

△乃　三去

尾　日今さ寺子僧誘て去の乃　ソソ
義武者の明るの乃向苦花　翠桃
橋　土性に分くるちの社乃　コ去
豆をあもれむ乃の乃珠数　、
花　夕のくる乃い通されたくて　乳什
卜吉の乃れてきひ寺の乃　コ十
岳杖のあちくむけく義狭乃　都武角
朴　かくをげくをを不拍る　、

△石・岩・砂・土 面去 京九去

去の面石の兄乃者すゝて 佳風
石居もう おもゝ一ゆ 、
石黄ゝ木祇川ある乃合て 才九
田の中ゝ耕砂ゝる石の 風
石切立て 門の面寄 影業
孤立を押る石の 初嵩 、
石ゝ之ゝ之さ 孤ゝ之の月 ソラ
石碑ゝわて 象厚の月 風

一橋

厳まる岩木のくさき岩ゝて 戦人
岩の月より義乃ゝ ヤ水
岩ゝ木乃の義ゝ乃ゝ 旦菜
ひゝ砂ゝすゝる指ゝ松のまえ 信化
小砂ゝるみゝゝる 鉦猶 萩人
土をつくる 熟をゝ 口通

雅

拾

去

疏

問

仰ゝの今ゝ糸つき去肥て 知足

□美居処戦不煩 古八三去

京九 ちゝ居ゝ二句去四門ゝ居処ゝ三句去
同二 体用の兄ゝ乃ゝ京ゝ垣の孔ゝ二句去
▲蒸ゝ三ゝ美居ゝ煩ゝきゝ自知ゝ実ゝ古式
を居客ゝ出ゝれゝ用ゝゝ支ゝ下ゝあゝ 依
居ゝ人の住ゝれゝ「宮出義仍反雪住門
垣壁築地又柵立美尸ゝの孔ゝ勿住居ゝ
ゝ支孔ゝ徒句も及ゝ美居ゝを煩ゝる有ゝ
巣の戦ゝ穴走の孔を煩ゝる二同

小文

ちゝ 立ゝ住ゝ成ゝ ちゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 翁
ちゝ 立ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 信水
ちゝ 立ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 史邦

ち拾

弄ゝ之ゝ之ゝ之ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 狗雪
立ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 呂九
古四孔ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 翁

拾

尼ちの書面〳〵考〳〵と　昌碧
ちかい　絢繍おられた水のときゝ　独知
夕良乃新さゝ乃〳〵久〳〵さよ　幾人
ちかの戸を推う又明そとふたゝ　巴兮
抵細工ゝそ面の日そよきゝ　ソ由
ちゝ　夕阪乃香〳〵ちく　お阪う　吉次
上阪を言発孤さ寺を拾　件阪
更元〳〵〳〵空工日のあ〳〵　千中
文遊　橋さ〳〵ちる山講の仲百口色　僧流
百ちゝ　二ゝを底のち〳〵〳〵陸の巣　冝由
在ヤ　繁まれて書の色表口京永〳〵　比拾
三孤　甘ゝよゝねゝちゝ山ち　广山
笠　あの足四る出ち〳〵の橋工咲あり　産支
ちゝ　二阪の言のち件く〳〵ふり迄　り和
レ、　矢〳〵〳〵きゝ〳〵ろ阪や看板　糸角
門口　茨口寺苔も九万八千新　芳及
三孤　一アの金〳〵〳〵店を長〳〵　釈水

羽鶴
有梁
七面
梅夫
呂杯
千梅
五ラン
佐角
小溟
文芳
支水
田新
山市
右弓
宋弥
羽
宮不

梅
乃
ミヨシ

叩くの用意を床の活花
出代の内い内多も稀ゝ件
ねゝ人の舟工ちの廻廻
友ち〳〵も凡のあ日の載工ん
内い臭ゝを右て番ゝり

さゝ
作ゝ

造作ちの　梅う吹徒
内とんの付て破る呑ゝる
新毒の陸う宏乃切低
千梅る店をゝさる初月
天内
店新
ゝの笠工及ぬ丁のたひ刻て
千新ゝ寺苔も一村
文遊
エンヤ
ゝを丞くいちちの作ひゝねう
小紙の切面ゝ猫の振せき
掃の付て筆を尺く根のち〳〵
ゝ乃の七ツ記る某度ゝ
ひさゝみ札を射阪乃り
見
イン
桂ヤ
杖凡ゝ桂の戸ち立る孫入て
宮不

老敬　家名 支戸　あさ　仙　冬　ひさ　古日　三ツモ

・春泉

二ツ三ツ雪中に孫くて　一泉
さため申せる玉乃境月　翁
家うてわる我ぬ衣　小枝
あさくふむへき芝山の雲　雪口
菅の戸の花まうろす不すて　渓生
△春　三去　カヘ四五　古八去
月出てさき春をうむ西おて　ソラ
冬春鈴る楼閣の宿に春の来て　翁
きくらく谷くも立ふ春の也く　支考
あさの竹路並ふ満小春　翁
見木ふうる谷々の小春　小コン
冬の宿春す　仙造て　嘯山
見されて岩屋に鳥止れす　沢士
月ひす春屋をよつてきふ　弥砌
ぐちより今の立る立ふ春　従者
晩の月見をさて　春屋　音中
ふくろくにさ春の小借春　玄叙

笠　浪　音　支満　雜　翁　友

花春と見えて萩に白楼　執筆
大坂に一丁程ある大工小屋　華二
名古屋よりもさぎの紙で　、
△高号ノ春五去　古八去
けあ弟の茶屋乃そ春も一庭　考
拷春のせとを涼しる　川　牧亭
名月に酒屋のねる不んだ　キ言
呉服屋にも土産のうりね　栗ル
青春ノ涙　丸にあわしむ　仙化
たび数六西に柳屋の月を見て　キ角
色綿やる　酒屋の三方　フ船
遊之春の秋見も人の代さり　弟
△家事川冬ノ二去
弟とて西に茂家の足うらく　りホ
麗てうけし　家移りぬり　、
ぬり笠の花も昔の行山　家　吏研
仮家の不帯　足了家　仮　、

△家・宿・門・戸・垣　五去

霓　ソラ
笈　許六
帝　支考
笠　ラ
棹　宿　翁
炭　洒落
古　乙峯
友　キ品
　　卓袋
　　去芳

△戸・垣　五去

皇　小枝
台　白扇
岩　右紀
夷　嵐雪
友　翁
古　自笑
　　揚东
岸　嵐雪
　　荻人
　　北リン

あ

拾

松

弥吉

夕

六行

廿四

釈迦に祭する 孫の手 お 杉風

△位・宮・拉 夏去

さそり 起すお位乃 侍 落柿

山伏位て 人 ヤ水

雪毎に栗たもむ位ひろ 伐水

位ろもむらむ 俳の沼乃 百阿

宮に火打す十夕の 百 呂お

一摂入して夏医宮乃月 文艸

樋をひる家の宮乃月使て キ角

たゝめ戸ちる柿 寿社 宮 寿春

小便に行ま ゝ 柳 柱 宗友

朋半の中に立て ゝ 世位 柳汨

△店・棚・夏 夏去

古人ゝの仕事の店も荒果て 朱雄

姫姫 素店あゝの山 疾 垂天

乃つ事の茶初々位て 柳の 極文

ちの吟 ゝ 待の 盃 柳 史邦

戸

難

去

了

矢

草

歩

古ちの夏をふめおけ 風菜

姫たに面とゝ ゝ 袖夏 、

扶ゝにむ人をユむ巳夏 宋 祚御

月子を入て夏に菊乃自 文志

△尾・蓆 お去

草ゝ花ゝ 彦を結ひく ソラ

尾ゝ 尾ゝ 尾る町の老て 蛍 汝至

黒谷の席に白きけ 畑 宋庶

何ゝもむの席乃 起ゝ 素冠

席ゝ内女のゝすの席月 揺朱

ゝんゝく席の人乃来ゝて 昨ゝ

△風呂 お去

お伊の蜂女のそ也居ゝ 伯風

席衣 一ツ ゝ ゝ乃ゝ夕ゝ れ りお

山ちの伊ゝ乃ゝあゝひゝの五て 栗ル

ゝゝく扶をおゝす ゝ乃ゝ 生航

△蓆・詰 お去

三百

[illegible] 暴源
[illegible] 宗知

△京都京根　打去

[illegible] 知矢
[illegible] 松次
[illegible] 許六

雲

[illegible] 京根の去り

白

[illegible] 代は京根きて　リ由

炭

[illegible] 京根きる之　ヤハ
[illegible] 居[illegible]の京根　、